

ヒーロートリガー

悠士

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俳優の父を持ち、有名になるきつかけとなった「ヒーロー」を好きになり、憧れ、なりたいと夢を見ていた青年・清瀬澄人^{きよせすみと}。現在は駄菓子屋の店長になっていた

そんな彼は「旧ボーダー」と呼ばれるメンバーの1人だった

一度は戦いから逃げた澄人が、再びトリガーを手に立ち上がった

何のために？

なぜ戻ったのか？

澄人が戦う理由とは？

目次

ブラックトリガー争奪戦

1話	ハズレの味は…	1
2話	迷い、悩む味	10
3話	追い求める理想の味	28
4話	激闘の味	44
5話	終わりど、罪の味	63
最終話	夢の一步目の味	78
エピローグ	感謝の涙の味	100
閑話	ヒーローに憧れていた少年	
7話	困っているときはヒーローが来	
てくれる味		108
8話	破棄トリガーは可能性の味	

123

9話 未来への加速

清瀬澄人 設定

148 137

ブラックトリガー争奪戦

1話 ハズレの味は：

「さむっ…」

木製の扉を開けて青年は一段降りた。室内のような場所は暗く、薄っすらと商品棚のような物が見える。青年は壁のスイッチを押して電気を点けた

棚には10円の大玉の飴やガム、50円のラムネ、30円の運試しのガム、スナック菓子など様々な菓子の類が並べられていた。それらを無視して壁に向かうと鍵を開け、横にスライドさせてからシャッターを上げた

「うう…元気だなー小学生は」

年をとったジジ臭いことを、学校へ向かう小学生を見ながら呟いたのはこの店の店主清瀬澄人だ。まだ20歳の彼は1限目が体育で、すでに体操服に着替えて投稿している小学生を見て心配と呆れで見ていた。澄人も昔はヒーローに憧れる活発な子供だったが、今ではその欠片もない

とはいえ、ヒーローが好きなのは変わらないので。毎週やっている特撮ヒーローは逃さず見ている

「行つてくるね」

「おー、気をつけてな」

玄関口から出て通り過ぎたのはシヨートヘアーの澄人の妹、清瀬舞^{まい}だ。今は中学3年生で受験勉強で忙しい、のが本来の3年生の状況なのだ。卒業したら店を手伝うと言つて進学は考えていないのだ。確かに駄菓子のお店は儲かるのが難しい。だから経済面を考慮して進学を考えていないのだ

手伝つてくれるのはありがたい反面、妹に将来を選ばせてあげられないことに澄人は悔しさも感じていた

「はあ………にが………やっぱイチゴミルクはあめえな」

ことあるごとに澄人には味覚が変化する。それは何も食べていないときでも。舞に手伝つてもらうのが間違つてしていると訴えるかのように、突然舌が苦味を感じたのだ。ゴーヤを食べているようなくらいに。常備している甘い飴を口に入れて、苦味を消して店の扉を閉めた

今日も仕事をするために商品の補充や予定を確認していった

昼も過ぎてやるべきことをやってテレビを見て退屈そうにしている澄人。駄菓子は主に子供がターゲットだから、下校時間になるまでは大体暇だったりする。たまに大人が来たりもするが

なにもかわらないいつもの日常、そう思っていたときだった

『えー速報です。三門市立第一中学校で…ええ!? え、あ、近界民^{ネイバー}が出現したと情報が着きました』

「つは!?! 第一つて舞がいる…」

寝耳に水とはこの事を言うのだろう。立ち上がった澄人はすぐに旧世代となつてしまったスライド式の携帯を開いて舞に連絡をした

「たのむっ…出てくれ…:…:…つ、舞か!?!」

『お兄ちゃん?!』

大事な妹を失いたくはないと、無事でいてくれと必死で願いながら数コール後に応答があつた

「無事か!?! 怪我はないか?」

『うん。あたしは大丈夫。隣のクラスの三雲つて人がボーダーの人みたいで、それで助かつたよ。でも—』

大丈夫と聞いて澄人は安心した。両親を失い、祖父母に引き取られてから祖父も病気で亡くなつて家族が減つていった。これ以上失いたくないと強く思っていたからこそ、舞の元気な声に安心できた

「どうした? なんかつたのか?」

『えっと、違反？ とかしちゃったみたいで……嵐山隊の人に怒られてた』

「そ、そうか」

嵐山隊というのはボーダーの顔として広報活動などをしてる部隊だ。その人たちに怒られているってことは規律違反をしたと言うことだ。間違いを犯せば怒られるのは当然だから澄人は大して気にしていなかった

「とりあえずもう帰るんだろ？ 迎えにいくから待つてるよ？」

『え、でも…授業は続けるみたいよ？』

「は!?! 襲われたんだろ？ 何で!?!」

『だって、壊れたの特別教室があるほうだし』

襲われたのは特別教室で、クラス教室で続けければ問題はないようで授業は再開するらしい。帰宅させるの正解だと教師たちに怒るが、受験前と言うことで少しも無駄にはできないらしい。面接対策や応用復習など3年生にとっては重要な時期だ

高校に行くことを選ばなかった澄人にはイマイチ共感はできなかったが、舞の将来のことを考えると少しでも力を付けさせてあげたかった

「はあ…わかった。でも放課後には迎えに行くからな。今日は店を早めに閉める」

『あ、うん、わかった』

結局、舞のためと考えて帰らすことは諦めた。代わりに迎えに行くことだけ伝えて通

話を切った。そのあと横の扉が開いて年老いた女性が座っていた

「すみくん。舞ちゃんは大丈夫かね？」

「うん。無事だつて。今日は早めに閉めて迎えに行くよ」

すみくんと呼んだのは澄人の祖母の清瀬フネ。2年前に病気を患ってから一気に体が不安定になり怪我もしやすくなった。殆ど家の中で生活をする事になり、せめてこれくらいはさせてと2人のご飯を作っている

「そうだね。そうしたらいいよ」

舞の無事を知って安心した祖母は開けた扉を閉めた。澄人は学校が終わるころまで店を開けていたが、結局それからきたのは2人ほどの大人だけだった。約束通り迎えに行くために父親が買っていた車を使って学校まで迎えに行った

「お兄ちゃん！」

「ん。開いてるぞ」

校門の近くで待っていると舞とその友達もきた。舞と仲の良い奴だったなと思いつき、断る理由もないからと一緒に乗せて発進した

「すごい綺麗だったねー！」

「ねー！でもアタシは嵐山さんが推しかな」

まずは舞の友達を送るために車を走らせていると、駆けつけてくれた嵐山隊の話をし

ていた。どうやらテレビの有名人を直接見て興奮していた

舞が嵐山隊の話をして少し懐かしい気持ちになっていた。今の本部基地が作られるようになってから完成までの半年間。何度か面倒を見てやったことがあるからだ。あの頃もだったテレビに映ることに臆することもなく堂々としていた。肝の据わった奴だなど記憶にあるし、結構成長もしていた

「ねえ、アレってなに…?」

「あれ?……お、お兄ちゃん!! 商店街に!」

「なっ……トリオン兵!? なんでまた外に!」

話も盛り上がっていたところで友達が、次に舞が外を見て澄人が驚いた。鯨のような白い巨体が宙に浮いていたのだ

「きやあああ!?!…なに、爆発?」

「つち、面倒なのが出てきたな。悪いけど婆ちゃん回収してから避難所に行くからな!」警戒区域外に出てきたトリオン兵はイルガーと言って拠点強襲用爆撃型。腹が開いて小さい爆弾を落としていく。澄人が面倒と言ったのはイルガーは宙に浮いているため接近は難しいというところだ。しかも装甲は厚いため半端な攻撃は意味がない。極めつけは確実に仕留められなかった場合自爆モードに移行して大規模の爆発をする

幸い交通量が少ないところまで来ていたことで速度を上げて店へ急いだ

「婆ちゃん!!」

「おかえり、すみくん。ご飯はまだかかるから待っててね」

「そんなことより避難するよ! 近界民ネイバーが商店街のほうに出てきたから。舞は防災靴を頼む!」

「うん!」

これから夕ご飯の支度をしようとしていた祖母の手を持って車へ、舞は玄関の横の収納棚から災害用防災靴を持ち出し、避難所に向けて車を走らせた。空いている場所に受け取ったブルーシートを広げ荷物を置く。舞の友達は家族も来ていたので合流した

「お兄ちゃん…行かないの?」

「…言つたろ? ボーダーは抜けたって」

ゾロゾロと人が増えていく中、舞が不安そうに言った

一般人として過ごすことになってからボーダーとの関わりは無くなった。最初の1、2ヶ月は連絡などしていたが、徐々に減っていき半年も経たずにメールすら来なくなつた。寂しさを感じてはいたが店の経営をしていくうちにそれすらも薄れていった

「ハズレ…か」

ネイバーが現れたのに何もしない。戦わない選択をした澄人にサイドエフエクトが反応し口の中が苦くなった。つまり、澄人にとってこの選択は「間違い」だということ

の証明だった

「ご飯配られているから取ってくるよ。舞は婆ちゃんと居て」

「うん…わかった」

「すみくん。ばあちゃんはそんなにいらないからね？」

「はいはい」

人も落ち着き始めたのか、ボーダーの職員の人が食事の配給を始めてた。3人分の食事を受け取り食べ進めていたら、メディア関係の人が避難した人たちにインタビュウをしていた。何も知らないよりはマシだったとしても、家や店を壊された人だっている。そんな人たちに「ネイバーはどんな姿をしていますか?」「現れたときどこに居ましたか?」なんて傷も治らないうちに好奇心で聞いていくのは誰もが見ていい気分にはならなかった

そんな中で気になることを数人が続けて答えていた

「メガネのボーダーの人が助けてくれたんです」

「メガネを付けたボーダーの男子が瓦礫をどかしてくれたおかげで—」

「もうダメかと思いましたが、白い服のボーダーの人が来てくれて—」

小さい子供や頭頂部が薄くなっているおじさんなどいろんな人が「メガネ」「ボーダー隊員」「白い服」「男子」と共通して言っていた。澄人にはそれが本当にボーダー隊員な

のか疑問だった

ボーダーで白い服。つまりは訓練生ということになる。訓練生は本部以外でトリガーの使用は禁止している。それは本部設立前にみんなで話し合って決めたことの一つだし、何度か入隊試験で監督をするときにも説明はした

だから澄人には規則を破った彼は本当にボーダーの関係者なのか疑問だったのだ。訓練生で破れば文句なしの追放だ

とは言え、こうして人を助け。感謝の言葉を述べているということは人命を救い、救助活動をしていたのだから謹慎とかで済む可能性もあるかもしれない。なにより、澄人にはその隊員が自分よりヒーローだなんて思えた

やがて近界民^{ネイバー}、爆撃型トリオン兵イルガーは倒された。ボーダーからは市街地^{ゲート}に門が発生した理由は近界民^{ネイバー}の新たな攻撃であると発表。現在は門^{ゲート}を強制的に封鎖している。原因究明と対処に全力を尽くしているとメディア担当の人が告げた

翌日には帰宅し、学校は一時閉鎖。店への被害は衝撃波が来たのかガラスがひび割れ1枚、破壊が2枚だった。窓の交換の依頼と散らかった商品や部屋の物を片付けるのに2日を費やした

2話 迷い、悩む味

8年前

清瀬澄人12歳。中学1年生。秋。下校途中

この日がオレの人生の転機とも言えた。目の前には白い身体の巨大な化け物。それが異世界から送り込まれたトリオン兵だというのは当然知らなかった。黄色い目を向けられると怖くなった、だけど同時に興奮していた

まるで特撮ヒーローに出てくる怪人たちみたいだ、と。ならばヒーローも本当は居るんじゃないかと期待した。漫画みたいじゃないように思うようにされているだけで、実はオレの知らないところであつこよく戦つて平和を守っているんだと。でも、さすがに現実はそこまで思い通りにはいかない

「大丈夫か、君？」

オレを助けてくれたのは刀と銃を持った人たちだった

この人たちは「ポードー」と言い、近界民ネイバーからこの世界を守るために密かに活動している団体だった。ヒーローではない、だけど、オレにはまさにヒーローみたいでカッコよかった。純粋な子供には夢が現実になったことが嬉しく、そして自然と自分もヒー

ローになりたいとボーダーへ仲間入りをしていた

それから2年。身体を鍛えるのが一番とトレーニングをがんばった。木崎さんは父親が消防士ということもあつて一緒に鍛えた。とはいえ、さすがにマツチヨまでは求めていないので程ほどに

剣は忍田さんに教えてもらった。ボーダーの中じや一番強い。けれどたまに訓練のやりすぎで城戸さんの車を切ってしまうことも

林藤さんはからかうのが楽しいのか弟子の風間かざま進しんさんと遊ばれることも。仕返しにメガネのレンズを触りまくったら30分以上もくすぐられてしまった。ちよつとしたトラウマになってしまった

迅くんは1個下だけどゲームを挑んでもいつも勝ってしまうからそこはつまらなかった。その理由がサイドエフェクトという超能力みたいなもので、未来が視えるって知ったらズルじゃんと呼んで、2度と一緒にゲームをしなかった

オレにも少し前からサイドエフェクトらしいものが発現した。それが「味覚当選」。言つてしまえばオレが知りたいことに対して「当たり前なら甘い」「ハズレなら苦い」と2択に分かれる。なのでクジ運は高くなつたし、パーティーなんかでは良い物を当てていった。最終的には選ぶのを最後にさせられて対策をされてしまった

良いサイドエフェクトとその時は思ったけど案外不便。答えが出たら何か食べない

と味を変えないと続くし、反応するのは5分以内の物事だけ。迅くんほど未来が分かるわけでもない

何事も順調。ボーダーの目的である橋渡しや交流もオレは賛成だった。世の中にはいろんな人がいるけれど、言葉が通じるなら話し合える、理解できる。協力だってでも、現実には甘くは無かったし。オレは本当の現実というやつを知ってしまった

「いいのかい？ 一度向こうに行けば命の保障は無いんだよ？」
「分かってる。でもオレたちが訓練したりしたのはこういうときのためでしょ？ だったらオレだって行くよ」

ヒーローはどんな状況だって恐れず戦いに挑んでいく。そんな姿をオレは憧れていた、カッコいいと尊敬していた。テレビの向こうは虚構だけど、手前は本物。赤いスーツを着ているわけでも、マスクを被っているわけでもない。今日まで訓練してきたオレは強いと自信はあったし、サイドエフェクトでどうすれば良いのか教えてくれる

だが、数時間後には仲間は次々と死んでいった

「つ……なん、で……みんな……みんなあ!!…風間さん！ 相馬さん！ 梅先さん！ 平良あ！ 甲斐さん……」

トリオン体は破壊されたからどんなに叫んでも返事は無い。離れたところでは身体を斬られて血を噴出す行方さんがいた

「つつ!! あ…あああつあつああ!!…な、なんで殺んすだああ!!」

いつも笑って、時にはドジをする行方さん。オレはこの人が好きだった。守ってやれなかった。怒りと悲しみと後悔に支配されたオレは、自分だけに調整された両手剣の雅臥^{まさがね}を握ってトリオン兵に突撃する

サイドエフエクトを使い右へ左へ攻撃を回避しながら破壊。1ミリも動かないソレを怒り任せに刺し、踏み砕き、切り裂き、叩きつけていった

「つう……つううあつあああ…」

粉々になり跡形もなくなると行方さんのところに。だけど即死だったのか息はしていなかった。想いを一言も告げられず好きな人を失ってしまった

初めて行った近界民^{ネイバー}の国は滅んでしまった。オレたちボーダーも多くの犠牲を払うことに。20人いたメンバーは半分になった。トリオン体を破壊されて怪我をして生き延びた人もいる

この世にヒーローはいない。いるのは、ただの無力な人だけだ。トリガーを持ったところで結局は強くなった気がするだけ

ボーダーはすでに戦争をしていた。オレはそのことを気づいていなかった。今までずっと格闘ゲームで雑魚を処理していくだけの感覚だったに過ぎなかったのだ。本当はもつと、怖くて恐ろしくて、命を奪い合う血みどろの世界だった

この現実には憧れていたヒーローはどこにもなく、世界の果てまで行ったところではない。そしてオレも、ヒーローにはなれない。戦争を知ってびびったオレは戦うことから逃げた。同じように真都ちゃんもボーダーを抜けた

その半年後には三門市を近界民^{ネイバー}が襲った

オレは何もできず、玉狛の部屋で蹲っていただけだった。オレより小さい桐絵ちゃんは戦った。怖い思いをしたのにすごいと思う

本部ができてからの半年は新入隊員の教育をした。自分のトリガーは玉狛に置いて、ボーダーがこれから使うというトリガーを持った。殆どの子が近界民^{ネイバー}に復讐をするためにと言っていた

ボーダーを抜けてからは祖父の店を継いで1日中働いた。覚えることも多く、婆ちゃんに助けてもらいながら4年を過ごした

今でも考える。ボーダーに入らなければ現実を知る必要は無かったんじゃないのか？ と。ヒーローじゃなく別のものに憧れていればよかつたんじゃないか？ と。後悔が次々と出てくる

現在 12月18日(木)

清瀬澄人20歳。駄菓子屋店長。冬。仕事中

『こんな小さな物が近界民^{ネイバー}を引き寄せていたなんて信じられない!』

『ボーダーは問題は解決したと発表がありました。住民からは不安の声が寄せられています』

『マスコットキャラのような嵐山隊の人たちが問題の解決をしたと言っても、我々一般市民には証拠が提示されていない。本当に解決したのか怪しいものだ』

「と、著名人の人たちは言ってますよ? 城戸さん」

「問題ない。反論してくる人がいるのは想定内だ」

いつものようにテレビを点けて仕事をしていると、13日のボーダー掃討作戦で後悔されたトリオン兵の画像がニュースで度々出るようになった。また、コメンテーターや警察や経済などの専門家を呼んで討論をしたりなどボーダーに対して不満を口にした

いた
それを一緒に観ていたカウンター越しにいるボーダー最高指令の城戸正宗は動揺することなく答えた

「話は戻るが、我々に協力はしない。ということでもいいのかね?」

「しがない駄菓子屋の店長になんで協力を? オレはもう一般人ですよ」

城戸指令が澄人の下へ来たのは玉狛が匿っている近界民^{ネイバー}の所持するブラックトリ

ガアの確保、および始末の協力だった。脱退してから4年も経っているから立ち直っているかもしれないと指令自らやってきたのだが澄人は断った

「……そうか。そうだったな。君はもう戦いたくはないと言っていたな」

「それだけじゃないですよ」

「どういうことかね？」

「オレは……確かに戦争から逃げたけど、ボーダーの理想というか目的は今でも賛成です。近界民ネイバーだからと一括りに敵として排除は……納得していないから」

恐怖は克服できない。4年半前の澄人の姿を知っている城戸指令はこれ以上の協力はもうしないと諦めた。だが澄人が断ったのはなにも戦うのが怖いのが理由じゃない

ボーダーに入って知った活動目的。玄界ミデンと近界民ネイバーの橋渡し役。それはまるで敵にも話し合える、分かり合える奴がいるヒーローの物語の盛り上がる要素の1つでもあった。澄人はそれに納得し手伝うと訓練をがんばった。それは今でも変わらない

「だから今のボーダーのやり方には納得できない。協力できない、ということかね？」

「……うん。城戸さんのやり方が間違っているわけじゃないのは知っている。けれど、オレは……前のボーダーのほうが好きだから」

今のボーダーは大半が近界民ネイバーへの恨みや復讐を目的に人が集まり、組織は大きくなっ

ていった。大規模侵攻を凌いだ城戸さんは近界民ネイバーを排除すべき敵として掲げることで大きな支持を得られた。澄人たちはそれ以外の方法を見つけられなかったのだ

「時間は戻らない。あの頃のように理想だけではただ蹂躪されるだけだ」

「……………」

何も返せない。城戸指令の言っていることは間違いでなく、そして澄人自身が理解してしまつたからだ

理想をいくら語つたところで、叶えるための準備をしたところで強大な力の前では無力でしかない。その結果が仲間を多く失い、理想とは程遠い目的で表に出たわけだ

「ところで、何も買わないなら帰つてくれないかな?」

「……………」 長話をしてしまったようだな」

これ以上もう何も話すことは無いだろう。澄人は戦わない。それが分かつただけでも1つの収穫ともいえる。協力はしてくれなくても、玉狛に加担をするということも無いのだから

沈黙を破つた澄人は本来なら客に対しては失礼なことだが、帰るように促した。城戸指令は後ろを見れば籠にお菓子を入れた子供たちは数人並んでいたのだ。何かを買う予定はなかつたから言われたとおり帰るために出口へ向かう。外へ出る前に足を止めた

「清瀬君…君はいくつだったかな？」

「はたち20歳ですよ」

「そうか。君と飲めないのが残念だ」

「オレも。夢が叶えられなくて残念ですよ」

ちよつとした世間話。久しぶりに会った親戚の子と話すような内容だった。表情も変えず残念と言つて店を出て行つた

「お兄ちゃん夢叶えなかつたの？」

「うーん、お兄ちゃんの夢つてすーすーつごく難しくてね、諦めてしまつたんだ」

レジに商品の値段を入力しながら子供たちと会話をする。純粹で氣遣うということが難しいだろうから、澄人には耳が痛い会話だった

「どんな夢だったの？」

「悪者と仲良くご飯を食べたりするヒーロー、つて感じかな」

ボーダーと一緒に叶えたいと思つていた夢。脱退した今ではそれはもう叶うことがない。困つた顔でさつさと会計をして次の子供に変えようと思つていたら、また懐かしい顔が現れた

「澄人君、久しぶり」

コートを着た長い髪の女性。聞き覚えのある声にお釣りを返す手を止めてしまつた

「つ……真都、ちゃん……？」

美人になっていた九条真都が店の入り口で立っていた

ボーダー本部に戻った城戸指令は司令室に向かっていた。その途中の廊下で外務・営業を担当している唐沢克己からさわ かつみと遭った

「どうです？ 外部の助っ人は得られそうですか？」

「いや。断られた」

「ということは、すでに玉狛が手を打っていたと？」

「それも違う。彼はもう戦う意思はないということだ」

「なるほど」

ブラックトリガーを相手にできるだけの力量を持った遠征メンバーに三輪隊を含めたとしても任務を達成できるかは不明。だが必要以上に戦力を費やせば余計な被害を招いてしまう。だからボーダーを抜けて協力できそうな澄人の下へ向かった

結果は残念だったが、戦う意思が無いことが分かっただけでも玉狛にも協力はしないということが分かった。サイドエフェクトもあり戦闘センスもあるため念のための行動だった

「ブラックトリガーの回収任務は予定通りに行う」

近界民^{ネイバー}を監視しているメンバーも含め、A級1位太刀川隊、2位冬島隊、3位風間隊、7位三輪隊でブラクトトリガーの回収任務及び近界民^{ネイバー}の始末を行うことが決定した

「澄人くん大きくなったね」

「そりやあね…確か…:180だったかな? そんな位だった気がする」

減った商品の補充や整理をしながら九条と他愛もない話をする。昔に戻ったような錯覚がして澄人は少し嬉しかった

「え、なにが?」

「なについて、真都ちゃん綺麗になってるし。服だつて洒落た着方してるから。今の流行とか人気のスタイルとか一番に知れるんだなって」

九条は脱退して県外に引っ越したから、いまどう過ごしているのか知らなかった。アパレルメーカーでシヨップ店員として働いている。それを知った澄人は納得した

「そ、そう…ありがとう」

「あ、今照れた?」

「ちよつと、からかったの!」

「そんなわけないって!」

「澄人くんはいつもそう！　面白そうなのがあるところからかってくる！　レイジ君の時だってそう！」

「アレはむしろ弄ってくださいと言ってるようなもんだろ!?　というか、真都ちゃんだって『あら、アタシよりゆりちゃんのほうがかわいいの?』って抱きついたじゃないか！」

「あ、あれは……!!……もう……澄人くん、変わったのは外見だけみたいね」

「えーひつで。カッコいい青年になったと言つてよ」

「垢抜けない少年の間違いじゃない?」

「……つぶ、あははは！」

「……つぶ、ふつぶつぶ」

まるで何気ない日常を謳歌する学生のような会話。この数年昔の仲間と会うことになかった澄人にとって嬉しくて、楽しくて、懐かしく感じる時間だった。昔は川の上に建つ玉狛の拠点でこんな馬鹿みたいな日常が続いていた。大人のはずの忍田さんもうつかり車を壊すほどに

こんな日々が続くと、誰もが思っていた

「……ボーダーには、もう……」

「オレも抜けたよ。4年前に」

「4年？ あたしより1年もあとに？」

最近のことは話し合ったが、九条は自分がボーダーを抜けてからのことをテレビでしか知らない。だから澄人が1年後になって抜けたのをはじめて知った

九条が知らないことを話し、聞いていくうちに表情は暗くなっていた

「そう……すごく、大変だったのね……ごめんさい。いきなり抜けて」

「真都ちゃんが悪いってことはないよ。ただ、オレが甘かったんだ。現実にはヒーローみたいに優しくはないってことを」

「……ねえ、澄人くん」

九条もまた逃げるようにボーダーを抜けた。誰も止めなかったから知ることが無かった。何があったのかを誰も伝えなかった。九条に非は無い。誰も責められる理由はどこにもない

少しの沈黙のあと問い掛けるように優しい声で口を開いた

「……なに？」

「いま、どんな味がしてる？」

「つ………どんなつて何のこと？」

「後悔してる？ ボーダーに入ったこと」

確かめるような問いかけ。澄人のサイドエフェクトは当時のメンバーは全員が知っ

ていたことだ。嘘をつく事ができない正直者な副作用

答えは、甘かった

「甘いんだね」

顔に歪みがないことはハズレの苦味ではないということだった。つまり澄人はポーターに入ったことは後悔はしていないということになる。九条は続けて質問していた

「みんなと仲良くならなければよかった？」

苦い

澄人にとってかけがえのない仲間であり、友人であるから

「救援に行かなければよかった？」

苦い

近界民ネイバーという国を、世界を、そして本当の戦争を知ることができたから

「戦闘員じゃなければよかった？」

苦い

後方で支援をするのは落ち着かず、仲間が傷つくのを見ていただけなのは不安がいっぱいだったから

「…戦うのが、怖い？」

甘い

命を失うのが、奪われるのが当たり前のように行われるのが怖い。大切な人を失ってしまうのがイヤだから

「そっか……じゃあ最後にするね。ボーダーを抜けてよかった？」

「……………つつ」

苦い

「…………アタシね、澄人くんのこと好きだったんだよ？」

「……ふへええ!!? な、ちよ……ええええ!!?」

「最初はヒーローに憧れる可愛い弟って感じだったんだけど、少しずつ強くなっていくし、よく笑うし、家族を大切にして……いつのまにか好きになっちゃってんんだよね」

突然の告白。数秒遅れて言葉を理解するとまともな言葉を発することができず変な声が出てしまった

「でも澄人くん楓ちゃんのこと好きだったでしょ？ 知ってた？ 楓ちゃんも澄人くんのこと好きだったんだよ？」

「つつ!!?……うそ……だって……そんな素振り……」

澄人は行方のことが好きで、密かに想いを寄せていた。それは相手のほうも同じだっ

たのだ。両想いだと知り、余計に告白すらしなかったことに後悔した

「高校生になってまだフリーなら告白するって言ってただけだね……でもその前に……」

「つう……っ……か、楓ちゃん……っ」

「澄人くんが好きになったって自覚したのは夢の話聞いたからなんだ」

「ゆめ……?」

恋を自覚したのは当時語っていた澄人の夢だと九条は言った

「近^{ネイバー}界民とお酒を飲んで楽しく騒ぐ」それが澄人の夢だった

九条もそれを聞いてイイ夢だとも思え、ボーダーの理想の一つとも言えた。同時に自身も澄人の隣で夢を叶えてあげたいと思っていたのだ

「……それじゃ私はもう行くね……澄人くんが元気でよかったよ」

「ん……オレも真都ちゃんが元気でやっているようでよかったよ」

他に話すこともなくなってきた九条は帰ることにした。いや、あるにはあったらう。だけどそれはお互いに触れては欲しくない部分だから。心の傷は簡単には治らない、目には見えない傷だから安易に触れていいことではない

「夢……か……」

九条が帰り残った澄人はポツリとつぶやいた

いつか夢見た。大人になった澄人が近^{ネイバー}界民とお酒を片手に騒いだりおいしい物を食

べたりする光景。そこにはいなくなつたみんなもいた、はずだった

『グハハハ!! どうだ! ドラゴンレンジャー? 貴様たちの希望は費えたぞ?』

『つくそ……ブルー! イエロー! グリーン! ピンク!!…オレたちは、まだ負けるわけにはいかないんだ!』

色々知らなかつたことを聞いて、思い描いていた夢を思い出していたとき、流していたヒーローの動画が聞こえてきた

竜をイメージした5色のヒーローたちが倒れていて、ボスキャラの大将が見下ろしていた。レッド以外は動く様子もなく、そのレッドもボスに踏まれていた

『無駄だ。貴様ら是我々大ガダルガー帝国に敗北するのが定めツガ!…なんだ!』

『はあ、はあ……そうは、させるかよ』

『ブルー!』

圧倒的力で組み伏せた大将は勝利を確信していた。地球もはるか宇宙の先にある帝国の支配下に置かれようとしていた。だけど、レッドの呼びかけによって目覚めたブルーが武器を持って撃った

『そうだな。どんなに苦しくても…負けるわけにはいかない』

『地球に住む人たちの夢を奪わせないために、諦めないために!』

『私たちが負けるわけにはいかないの!』

イエローたちも立ち上がっていき諦めずに、守るために戦おうと再び武器を手にした『愚かな。貴様らが抗わなければシルバーは死なずに済んだ。ここで大人しくやられて我々に従えば犠牲は少なかったのに』

『たとえそうだったとしても！シルバーはこの地球のために戦った！オレたちが負けることは今日まで繋いでくれたシルバーに顔向けができねえんだよ！』

最後にレッドも立って5人が揃う。澄人はきれいごとだなんて思う反面、空想の物語である世界が羨ましくて好きだなと感じた

『たとえ何度挫かれようと、諦めない心と支えてくれる仲間がいる限りオレは諦めない！！』

「諦めない……か。諦めたく……ないな」

満身創痍のレッドが力強い言葉で大将を倒すために真の力を解放した。そこからはギリギリの戦いで、仲間たちと連携し攻撃し、攻撃されながらも最後の必殺技を放って撃破した。こうしてヒーローたちは地球を守り、人々の夢と希望と平和を守った

エンディングロールが流れ始め、今期のヒーローは終わった。澄人は柵に飾つてあるフィギュアを見てしまいこんでいたはずの感情が燻ってきた

3話 追い求める理想の味

吐く息が白くなるほど気温は低くかった。コートを着てマフラーもして何とか寒さに耐えられるほどだ。それ以上だとすこし熱いくらいだろう

澄人が歩いている川辺は湿気もあるからもう1℃くらい低いだろう

「懐かしいな……なんで来なかったんだろうな」

到着したのは川の上に建つ玉狛支部。最上階の共有スペースに明かりが点いているから中に人がいることは確認できる

澄人がここに来たのはもう一度夢を見てみたいから

その為には戦わなくてはいけないし、辛い出来事だつてあるだろう。いくら脱出機能があつたところで100%安全で死なないというわけじゃない。脱出先を叩かれればおしまいなのだから

だけど澄人たち旧ボーダーのメンバーたちは脱出機能すらないまま戦つた。そのころと比べれば生存率は高くなっているのは間違いない

不安がないわけじゃないが、それでもヒーローと同じようにボーダーも誰もがなれるわけじゃない。トリオン能力がなければ戦えないのだ。誰にもできない、澄人にしかで

きないことだつてある。ただの思い込みでしかないが、今の澄人にはもう一度立ち上がるのに十分な理由だ

「お？ 迅の言うとおりで本当に来たな」

「林藤さん!? 迅くんが、オレが来るつて…?」

入るため玄関を開けようとしたら、勝手に開いて見知った顔が目の前にいた

相手は林藤^{りんとう}匠^{たくみ}でこの玉狛支部の支部長。どうやらタバコを買うために出ようとしていたらしく、そこへ丁度澄人と出くわしたというわけだ

「ああ、迅のやつが今日の夜当たりにお前が来るだろうつて言つてな。これを渡してやつてくれて」

「つ！ まつたく…：迅くんめ、オレが戻ることも織り込み済みだつたな」

どうやら今日の夜に澄人が玉狛支部へ訪れることは未来予知で知つていたようだった。林藤はポケットからトリガーを取り出した

それは澄人が愛用していた改造トリガーで、赤と白のヒーローのリーダー役でもあるレッドのカラーを模した物だった。これは本部で後輩を育成するときに不要だからと玉狛に置いていつた物。どうなったかは知らなかったが、そのままの状態で保管していたようだった。汚れもなく塗装剥げが所々あるくらいだ

これを用意しているということは、この未来も迅によつて予定されていたことにな

る。そのことを理解した澄人はしょうがない奴だなと、昔のようにゲームで勝てず諦めたときの気分を思い出した。未来が見える迅に勝負を挑んだところで勝てる見込みはほぼないのだから

「迅が用意したということはもう大丈夫ってことなんだろうが…平気か？」

「……わかんない。けど、やれることはやろうと思う。今度は夢を叶えたいから」

「夢？……ああ、お前さんの夢か。そんなときはオレも見させてくれ」

「ああ、もちろん。夢関係なく一緒に晩酌もしたいしな！」

「つぶ……まあがんばれ。面倒ごととは引き受けてやるから」

澄人が立ち直れる未来にしたんだなと林藤は思った。不安はありながらも覚悟を持った昔の仲間の顔を見れたことに安心した。これなら大丈夫だろうと

トリガーを受け取った澄人は久々に起動した

「トリガーON！^{オン}」

トリガーが光ると澄人の身体をスキャン、今の体格に合わせて作成されたトリオン体を自動で調整を行い換装が完了した

「お前さんのその姿を見るのは懐かしいな」

「オレもだよ」

白と赤の襟の立ったジャケット、グレーのパンツと靴の姿になった

久々に身体が軽くなったように感じていた。準備運動をするようにして感覚を少しずつ取り戻すと警戒区域へ向かって行った

警戒区域ではボーダーのトップチームと、阻止しようと立ち向かった迅と嵐山隊が戦闘を開始していた。数度の攻防の後に迅たちが後退することとなったが、不利になったからというわけでもない。目的の再確認と今後の打ち合わせをするためだった

対してトップチームは二手に分かれた陣営にどう戦力を分けるか、もしくは無視してこのまま玉粕に行くか話し合っていた

「もうすぐ監視をさせていたうちの隊員がー」

『わりい秀次。そつちに合流するの遅れそうだ』

「どういう意味だ…!? 緊急脱出だど!?」

近界民^{ネイバー}の監視任務をさせていた三輪隊の隊員が正体不明のトリガー使いに襲撃を受け、狙撃手^{すないぽー}の古寺が倒されたという報告が伝えられた

「三上。状況は？」

『はい、所属不明の人物が三輪隊の古寺くんを攻撃し、そのまま米屋くんと戦闘を継続。米屋くんの視界情報で得た画像を送ります』

今回のメンバーの中で一番小さい風間蒼也^{かざま そうや}がオペレーターの三上に状況の報告を求

め、それに応えるように簡潔に説明をしてから、得た画像をこの場にいた全員に共有した

「うわ、なにこれ？ ヒーローのお面って舐めてるでしょ」

一番に口を開いたのは耳を覆い隠すまで髪を伸ばした風間隊の菊地原士郎だ

共有された画像はポンチョを着ており、頭には祭りの屋台などで売られているようなヒーローのお面を被っていた。なにより目を引いたのが右手に持っている巨大な剣

「こんなデカイの見たことないな」

「レイガストより大きいんじゃないですか？」

黒のロングコートに腰に2本の弧月を帯刀しているのは太刀川慶。続くように言ったのは同じ服装で武器を持っていない出水公平だ

『戦闘が激しいようで、ちゃんと全身が映っているのはこれくらいです』

「いや、十分だ。問題はコイツ敵なのかだ」

「思いつきり黒でしょ？ ボーダーを攻撃したんだから」

アタッカー
攻撃手の米屋と激しい戦闘を繰り返しているようで、しっかりと全身が映っていていないのは着地した瞬間だけだという。風間は敵かどうかの判断を考えようとしていたが、太刀川が迷うことなく敵と断言した

ボーダーは近界民を敵とし、排除を目的として存在している。そのボーダーに仇なす

と言うのであればそれは敵ということだ

『わりの、秀次。こいつ強え』

「陽介!? くそっ!」

1人でなんとか戦っていた米屋だったが、相手のほうが強かったようベイルアウトで緊急脱出してしまった

「考えている暇はないようだな」

「これじゃ嵐山隊がどう動くかも分からなくなりましたね」

「……狙撃手組^{すないは}みはオレと迅を追う。風間さんは謎の敵で、三輪と出水は嵐山隊で分けよう」

米屋と古寺の2人分の戦力が失われた以上分散はリスクが高い。だが、正体の分からない敵を野放しにすればどこに横槍が入るのかも分からない。そもそも狙いは太刀川たちじゃなく本部への直接攻撃かもしれない

最低でもどこにいますかだけでもわかるようにしておきたいのが太刀川の考えだった。その判断に不安はありつつも各々指示に従って行動を開始した

部隊と合流するために無人の住宅街を走っている米屋たち。嵐山隊という戦力が増えたことで急ぐ必要が出た

だがそこへ、思わぬ襲撃者が現れた

「ぐわああ!?! な…?」

「ん? つ、古寺!?!」

まるでやられたときのような声を上げた仲間を見るために振り返った米屋。そこには胴体を通つ二つにされた古寺が映った

「つく! 誰だよアンタ? 玉狛の人間か?」

「なに、ただのヒーローに憧れているだけの男だよ」

古寺を斬つてすぐに米屋に切りかかる襲撃者。レイガストに似た大きな剣は槍型に改造した弧月で受け止めるには重かった

「つらあ!」

「つ!…切れた?」

力任せに振つて鏢迫り合いを中断させると槍を突き出す。首を狙った鋭い突きを襲撃者は躲すが、襟が少し切れた。完全に躲したはずだったのにな

ただの槍ではない。襲撃者である澄人は槍に対して疑問を持つと口の中が甘くなった。つまり正解ということだ。トリガーに何かを仕込むなんて珍しいなど考えていた

ら今度は苦くなった

「うえ……あーラムネうまい」

「ら、ラムネ……？ 戦闘中に食うって」

ハズレを引いたことで口直しが必要になりポケットからラムネのお菓子を取り出して、一つを口の中へ放り込んだ。水分を含んで溶けて甘さを感じたことで苦味が消えていく。戦闘中なのに食べるなんて随分と余裕のある奴だと米屋は呆れてしまった

「悪いね、こうしないと口の中がずつと苦くてね。それじゃ、続きをしようかつ!!」

「つく、おもつ……おわあ!?! ちよ、どっちからも攻撃ってありかよー!」

振り下ろしてきた剣を槍で受け止めるが、澄人はすかさず握る手の力を下から上へ逆にして、振り上げる。両手剣は上下に同じ形状の剣が付いているからこそその攻撃の仕方
「ありだよ。それがこのトリガーの特徴だからな」

攻撃手として高い反射神経でギリギリで躲す米屋。ジャケットが着られる程度で済んだ

澄人は振り上げたままのトリガーをまた振り下ろす。だけど今度はバックステップで距離をとって、槍を持ち直して連続で突いていく

「つ!! 速い! またかつ」

「オラオラオラオラあ!!」

シールドと併用して槍を躲したりするが、やはり澄人のトリオン体は傷を負わされていく。避けたのにダメージを受けるといふことは何かオプショントリガーがあるんだろうと考えた。仕込み槍はさっきの苦味で違うとでたので他の答えしかない

結果は甘かった

「ふーん…：多分、その槍って穂先が変形するの？ 旋空…：にしては派手じゃないしね」

「っ!? おいおい、なんでバレんだよ…?」

「エスクード!」

「は!? なんでボーダーの…ぐ!!」

タネが知られたことに動揺した瞬間を狙って地面から防御壁を出現させる。広範囲で出した後も他のトリガーが使えるエスクードはボーダーのトリガーだ。澄人の正体を知らない米屋はなんで使っているんだ? と戸惑った。その隙に両手剣のトリガー・雅臥^{まさがね}衿をエスクード越しに突き出す

姿が見えなくなつて動きが分からなくなつたことで、反応が遅れた米屋は右肩を斬られることとなつた。繋がつてはいるが動きに影響があるほど。しかも利き腕だから今受けたダメージは見た目以上に大きかつた

「マジかよ。わりい秀次。そつちに合流するの遅れそうだ」

澄人が予想以上に強い。しかも、使っているトリガーは確認できただけでも3つ。ま

だ何か隠しているだろうかと、少しでも分かれば仲間へ伝えられると考えた米屋は槍を構えなおした

「つつーわけで、こつちも忙しくてね。やられてくれないかな？」

「無理な相談だな。オレだって…今のボーダーに納得できないからここにいます」

「今の…？　ちよつと待て、アンタ…元はボーダーだったのか？」

「悪いけど、時間が惜しいんだ！」

予定していたチームとの合流は遅れそうだと伝え、戦闘を継続する。デカイ割りに巧く振り回して防御もこなしていく。槍は細く攻撃速度が速いが、ダメージを与えられる部分が小さいため少し躲すだけでも十分だった

今のボーダー、と聞いて引退した誰かなのか？　と考えてしまった米屋は一瞬気が緩んでしまった。澄人はその瞬間を逃さず、槍を弾き飛ばしてから身体を回転させて米屋を蹴り飛ばす。外壁に衝突した米屋は雅臥^{まさがおね}衿が飛んでくるのが見えて咄嗟にシールドを2枚張って防ごうとするが

「意味ないよ」

勢いは多少下がったが2枚とも貫通しトリオン供給機関へ達した

「マジかよ…わりい、秀次。こいつ強え」

最後に米屋はそれだけ言って緊急脱出した

光となつて本部へ飛んでいくのを見て澄人は何度も思った。あのころに、脱出機レ能があればきつとみんなは死ななかつただろう、と

「行くよ、みんな。もう少しだけオレ、夢のためにがんばってみるから」

今はもう死んでいった仲間たちに向けて、もう一度立ち上がった澄人は覚悟を口にす

る
バックワームを起動して交戦していた方向へ向かつていく。どこへ行けばいいのかはサイドエフェクトが教えてくれるため迷うことはない

真つ直ぐ向かつていくと、戦闘の音が目的地とズレ手いることに気付く。サイドエフェクトも音のするほうが甘いので方角を変えようとしたときだ

「つつつ!! おわつー……つぶなー」

突然何もないところから人が現れて驚く澄人だったが、黄色く輝く刀身が首を切ろうとしていたので咄嗟にシールドで防いだ。すると次は後ろから2人が現れて斬りかかろうとしてくるのでシールドを張った

身体を反転してやってきた3人を見据えた。まず目に付いたのはスコープオンだった。澄人の知らない新しく開発されたトリガーだ。それに姿が突然現れたことと合わせて他にも知らないトリガーがありそうだと考えた

「お前か、ボーダーのトリガーを使うという襲撃者は？」

「…あいつ……だったらどうする？」

黒髪で一番低い風間が確かめるように問い掛けた。着ている服は違うがその顔には見覚えがあり、誰かの兄弟だったことを思い出しかけた

「簡単なことだ。敵である以上、排除するまで」

まるで話し合いなど必要ないとスコープオンを構えて接近する

「つ……随分脆いな」

「問題ない」

振るわれるスコープオンを雅臥^{まさがね}祢で受け流していくが、何度か交わすだけでスコープオンの刃が欠けていった。硬さでは劣っているようだが、両手に握って戦う速度は油断できなかつた

風間は成人男性ではあるものの身長158cmとかなり低い。179cmもある澄人とは差が大きいため一見不利のように思えるが、小さい分小回りが利きやすい風間のほうが機動力が高かつた

「今度はこつちか…つ、忙しいな…」

風間と斬りあつて途中で菊地原が介入してきた

「だったら大人しくやられてよ。そのほうがこつちが楽になるから」

そのまま数度攻防を繰り返したら離れていき、代わりに歌川が間に入ってくる

風間たちと違いスコープオンは短く上下に刃が出ている。ナイフを2本互い違いになるような形だ

「ちっさ!?! 腕から!?!」

攻撃を躲し腕を掴んで蹴り飛ばそうと考えていたら、掴んだ手がスコープオンに貫かれた。腕からブレードが出るなんて予測できないことをされて澄人は動揺してしまい、その瞬間を姿を消して狙っていた風間が後ろから襲い掛かった

「つぐー! エスクード!」

ギリギリで身体を捻って致命傷は避けるが、背中から漏れ出るトリオンは甚大だった
「あー、やべえ……やっぱブランクあるなあ……知らないトリガーも多くてまんまとやられてる」

掴んでいた手を離して雅臥^{まさがね}祢で斬ろうとすれば離れていった。大きなダメージを受けたことで戦いの感覚が鈍っていることを痛感した

それだけじゃなく、引退してから今日までで増えた知らないトリガーに翻弄^{ネイバ}されていた。このまま続けていたら負ける可能性も高くなった。だけど玉狛に近界民^{ネイバ}を守るためにも負けるわけにはいかない

「出し惜しみ……するわけにはいかないか」

今までの戦いでこいつらは強いことに認識を変えると、まだしていないトリガーを使

うしかないと考えた

敵が本気を出してきたと通信で仲間^まに注意を促して再度攻撃を仕掛けた

スコープピオンが振り下ろされると雅臥^{まさ}衿^{がね}で受け止めるが、後ろから歌川が接近してくる。澄人はトリガーを持つ手の向きを変えると、風間のスコープピオンを弾きながら歌川へ切りかかった

「つつつ!!? つく、すみません」

咄嗟^まに手に持っていたスコープピオンで受け止めようとしたがそれは間違いだった。雅臥^{まさ}衿^{がね}によって碎かれ歌川は右肩から大きく切られてしまい、トリオン供給機関を斬られたことで戦闘不能となり緊急脱出した

「…? この音なん…?!? なんだよ、これ?」

トリオン体が破壊されたことで煙が発生して視界が悪くなった。けれど菊地原は強化聴覚というサイドエフェクトを持っているから、目の代わりに周囲の状況が分かっていた。煙の中で聞きなれない音が響いていて、何の音なのか探ろうとしたら突然青白いブレードが2本飛んできた

間一髪でシールドが間に合って防ぐことができた。雅臥^{まさ}衿^{がね}に似た形状をしていて、かなりの威力を持っている。トリオンの高い菊地原のシールドの1枚を貫き、2枚目はヒビを入れたほど

「これっ…まだ動くのかよ?!…ちよ」

飛んできたブレードは進む力が衰えず菊池原を貫こうとする。身動きできない状態になったところで回り込んだ澄人が雅臥^{まさかね}祢で切りかかる。間に風間のシールドが張られたが、斬るではなく刺すことに切り替えて躲すと、首を横から突き刺した

「っ…！」

「残り一人。悪いけどさっさと終わらせる。トリガーの性能もなんとなく分かったことだし」

状況が不利になって風間は撤退するべきか迷った。城戸指令からの命令はもう達成できないほど戦力は削がれてしまった。だが澄人はダメージを与えてるもののみまだ生き残っていた。背中への傷は大きいからトリオン漏れによるトリガー解除まで長くはないだろう。それに澄人自身は退くつもりはない。ならば風間に残された選択肢は残ったメンバーへの負担を減らすため、ダメージを増やすことだった

スコーピオンで何度攻撃しようとも雅臥^{まさかね}祢一つで防がれる。反撃されれば刃は欠けていく。手以外から出してもちよっとした傷を付ける程度だった。米屋や菊池原を落とすだけの力量はあると感じた

これで鈍ったのだから、本調子だった場合は無傷の可能性もある。コレほどまでに強い隊員がボーダーにいたのかと疑問に思い問い掛けた

「貴様は何者だ？」

「え、うーん……どうせもう城戸さんにバレているだろうし、隠す必要もないのかな……」
再び距離が空いて突然投げかけられた質問に少しだけ気が抜けて、意味を探そうとしたが、ないだろうと判断して素直に答える事にした
戦闘態勢を解いて顔を隠していたお面を取った

「おまえは……清瀬か」

「覚えていたんだな。蒼也くん」

なんでお前が、と数度しか会ったことのない澄人になおさら疑問しか出てこなかった。また澄人も

4話 激闘の味

ボーダー本部基地にいくつもある会議室の一つに城戸指令をはじめ幹部たちが集まっていた。開発室長の鬼怒田、メディア対策室の根付、外交の唐沢、防衛本部長の忍田が映し出された画面を見ている

そこには風間と戦闘をする澄人がリアルタイムで流れていた

「なぜ彼が？ しかもこのトリガーはボーダーの物じゃありませんよね？」
「当然じゃ。だが、エスクードやシールドはこちらと同じものだがな」

最初は誰か分からなかった襲撃者だったが、風間隊の2人を落とした後に仮面を取ったことで正体が判明した。本部で後進の育成のために半年間いたため根付と鬼怒田は知っていた。だが記憶にあるトリガーと今見ているトリガーはまったく別物。さらに脱退時には返却もしている

つまり、今トリガーを持つてゐることはおかしなことであるということ

「城戸指令か忍田本部長はなにか知っているじゃありませんか？ 確か彼も、旧ボーダーの1人でしたよね？」

疑問の答えを探している根付たちをよそに、唐沢はまるで答えが分かっているかのよ

うに城戸指令たちに問い掛けた

「…隊員の育成を始める際、彼は自身のトリガーを置いていった。玉狛支部に保管してあつたはずだが…」

「なるほど。盗まれた、もしくは彼の手に渡った、ということですかね」

唐沢の予想通り何らかの手段で澄人にトリガーが渡ったというのが当たった。当然保管が甘かった玉狛支部にも、その支部長にも責任を問われるのは避けられない。なにより、一般人でありながらトリガーを手にしたこと、ボーダーと交戦したことも併せて記憶処理はされることは話し合いをせずとも決定事項だった

部下2人を倒され孤軍奮闘をする風間は徐々に追い詰められていった。メイン武器であるスコープオンじゃ耐久性に劣るためまともに受ければ刃が欠ける。最悪砕けてしまう。それだけでなく雅臥衾まさがねと併せて襲ってくる飛来するトリオンのブレードは風間を少しずつダメージを増やしていった

「つく……!」

振られる雅臥衾まさがねを回避するが、澄人の反撃されないようにブレードを飛ばして防御させる。その間に雅臥衾まさがねを振った勢いを止めずに、身体ごと回転させてから投げ飛ばした

「そらっ!」

跳んで回避すればブレードが飛んでくると考えた風間は、シールドを展開して防御をすることを選んだがそれは間違いだつた。雅臥衿まさかねはシールドに阻まれて弾かれるように飛んだが、回転が突然止まって剣先が風間を向いて一直線に飛んでいった

「……………なにつ!？」

ただ投げたわけじゃないことに今更気付いても遅かつた。シールドでは防げないと考えて後ろに跳んで回避したが、待機していたブレードが飛来して両腕を切り飛ばした

「つぐ……」

「これで終わりだ」
着地するが目の前には雅臥衿まさかねを持った澄人がいた。腕がなくなつたことで戦い続けることが不可能になつた風間は、切られる直前に足裏から伸ばしたスコープオンを地面に潜らせてから澄人の足を貫いた

「地面から!？」

形状を変化させることができるスコープオンだからこそできる芸当。ましてや足裏から釣り針のように曲げて地面から攻撃してくるなんて澄人には予想していなかつた

少しでもダメージを与えるという最低限の仕事を果たした風間は緊急脱出した

「はー……………アレは予想外だつたなー!…」
槍、槍の刃を曲げる、消えるトリガー、どこからでも出るブレード。ここまでの戦闘

で澄人が知らないトリガーが4つもあつた

「4年もあれば色々開発されてるよな」

引退してからの今日までそのままだった、なんてことはあるはずがない。開発部門が存在していることは知っているから種類が増えているのは当然だ。恐らく他にも知らないトリガーがあるだろうと予想すると、サイドエフェクトが反応して口の中が甘くなつた

澄人は油断しないようにしないと、と考えてから戦闘が行われている場所へ向かつた

迅を負つた太刀川たちはやや劣勢だった。襲撃者のために風間隊をはずしたのか大きく響いていた

右手の弧月を横薙ぎに振つたら迅はバックステップで躲すが、左手の弧月で追撃していくと風刃を縦に構えて防いだ

「迅。油断澄人アレはお前の差し金か？」

「なーんのことかな？ オレは何もしていないよ？」

罅迫り合いになつたことで会話をする余裕が生まれたことで太刀川は澄人のことを

聞いた。けれど迅は何もしてはいない。直接的には。仮にしても素直に答えるつもりなんてなかった

だが太刀川は確信に近い自身があった。迅のサイドエフェクトは周囲の人間に干渉するだけで、本命の人間を動かすことができる

迅がAの前でイチゴアイスを食べれば、イチゴアイスを食べたいという選択肢が増える。AとBが買物をしているときにAがイチゴアイスを選ぶ。するとBも同じ物を買おうという選択肢が増えて選ぶことだつてある

今回は近界民^{ネイバー}確保を命じられたことで迅は指揮系統を逆手にとつて林藤支部長から命令されるようにする。そうして確保を名目に玉狛支部へ匿うことに成功。だが城戸指令は結果が気に入らず、いつでも切り捨てられる、尚且つ玉狛に容易に入り込み目的達成が可能な人物へ協力を申し出た

けれど断られことで予定通りトップチームを派遣することとなった。だがそれが迅の目的だった。自然な流れで澄人へ現在の状況を伝えることとなった

迅がしたのはそこまで。澄人が来るかどうかは本人の決断次第だったけれど

弧月を弾いてお互い距離を取ると奈良坂の狙撃銃の弾丸が飛んでくる。だが迅は当然のように身体を捻ることで回避。その瞬間に旋空を起動して襲い掛かる

「おっとー」

家の扉に飛び乗って躲すと太刀川が追いかける

攻撃手^{アタッカー}1位の凶刃が2本振り下ろされる。振り返る迅は風刃で1本を、左手で太刀川の右手を掴んで阻止する

「お前は何を考えている？」

「もちろんボーダーのためだよ」

未来^先が見えているからこそ迅の目的や行動が読みにくい。「いつ」「どこで」「どう動く」かが簡単には分からないからだ

ボーダーのためと言いつつも、今は敵対行動を取り、排除すべき近界民^{ネイバー}を守っている。近界民^{ネイバー}と仲良くしよう考えている玉狛派といえど、ボーダーへ敵対行動をした相手を守ることはない

三輪隊^{レッドバレット}が出向いたときにトリガーをコピーし反撃してきた、と報告している。攻撃能力のない鉛^{レッドバレット} 弾だったとはいえ、三輪からしたらやり返してきたと思っただけだ

近界民^{ネイバー}の考えがどうなのかが問題じゃない。近界民^{ネイバー}だから。それだけで危険視している。4年半前の侵攻があったことで、ボーダーがそう考えるのに十分な理由になる。迅が言う「ボーダーのため」というなら守るのはおかしいことだ。太刀川は余計に考えが分からなくなってきた。いまやるべきことは邪魔をする迅や嵐山隊、そして襲撃者の澄人の排除だ

「っ!?……!」

力で迅を押し倒せばバランスを崩し、狙撃が当たるかもしれない。追撃ができれば倒せると考えていたら、2つの緊急脱出の光が本部へ。その少し後に1つが飛んだ。方角から澄人の対処に向かった風間隊だと思ひ出すと、意識が逸れた瞬間を狙って迅はわざと倒れて太刀川を蹴り飛ばして地面へ落とした

すぐに立ち上がると風刃の帯を2本消費して追撃する。屋根から壁へ、地面に下りると塀を越えてコンクリートへ真つ直ぐに進むと刃が飛び出した。横へ跳びながらシルドで防御するも完全にはいかず横腹を切られる

「風間隊が……?」

『そうみたい。ダメージはけっこう与えたらしいんだけど、それでも倒せなかったみたい。今はリーダーから消えてるわ』

「……それは、結構ヤバイな」

太刀川隊のオペレーターくにちかゆうの国近由宇は送られた報告を太刀川へ伝えた。ある程度のダメージならブラックトリガーの回収任務は続行可能。だが古寺や米屋だけでなく、風間隊の3人までも失えばもはや不可能と言える

高い連携を誇る三輪と米屋の攻撃を躲していたと報告を聞いていた。戦闘経験が高い近界民ネイバだからなるべく損耗は抑えたかったのだ

「やってくれたな、迅。あんな手駒を隠し持っていたとはな」

「清瀬さんは強いよ？　なんとってヒーローに憧れているからね」

胸のうちにナイスと賞賛を送る迅。昔の澄人を思い出しても風間隊に勝てるかは不明。ブランクがあつたにせよ3人とも撃破したのは予想以上だった。希望に満ちた未来に近づけるには後々行う予定だったのだが、大幅に省略された

この争奪戦の結果がどうなるうとも、迅は必ず澄人を守りつつ近界民^{ネイバー}・空閑遊真^{くがゆうま}の入隊を許可させる。それが今最優先事項だった

嵐山隊を追いかけた三輪・出水のペアは数の不利を出水の弾幕で補っていた。誘導弾^{ハウンド}を大量に蒔いて時枝と嵐山を追いかけている内に三輪が木虎へ攻撃を仕掛ける

「……っくー！」

「っちー！」

スコープピオンと弧月じゃ耐久力に劣るほうが負けるのは当然で、ヒビが入り始めたときテレポートで援護に行った時枝が強襲。シールドで防いだところを木虎が横に回りこんで斬りかかる。バックステップで回避、ハンドガンを引き抜いて時枝に撃っている間に、出水は炸裂弾^{メテオラ}で木虎を狙う

「っぐー！　嵐山先輩!？」

「大丈夫か木虎？」

「はい、助かりました」

トリオンの少ない木虎では出水の炸裂弾メテオラを防ぎきることはできない。だから嵐山はシールドを木虎に張って守った

『三輪くん大変よ。風間隊がやられたわ』

「なにっ!? それじゃ襲撃者の位置は分からないのか？」

『ええ、そうなるわね』

三輪隊オペレーターつきみれんの月見蓮が風間隊壊滅の報告をしてきた。連携力では上を行く風間隊が負けるということに三輪は驚きを隠せなかった。一緒に聞いていた出水も同様で、敵がこつちに来る可能性があるんじゃないかと考えた

米屋・古寺への強襲に続いて迎撃に向かった風間隊の撃破。ブラックトリガー回収を命令された側からすれば、ほぼ玉狛の味方と考えるほうが納得できるからだ

出水の予想は当りで、隙を伺っていた廃マンションに待機していた狙撃手すなはいの佐鳥賢さとりけんがイーグレットのスコープで澄人を見ていた

『まずいッスよ。襲撃した男、まっすぐそつちに向かつてますよ』

『そうか。ありがとう、賢。そのまま監視していてくれ。風間隊を落としたということ
は狙撃は効かないと思う』

『了解ッス』

澄人はサイドエフェクトによって当たりの方向に行けば争いあつてい場所の大体の位置が分かる。迷うことのない進み具合に佐鳥は報告し、嵐山はそれを聞いて狙撃ではなく監視を命じる。A級隊員をたった1人で相手するほどとなれば狙撃は防がれ、逆に位置が特定されてしまうことになる

それぞれが距離を取ったところで風間隊撃破の報告が着たので状況の整理と対応に思考する間が訪れた。再開の狼煙を上げたのは出水だった

「誘導弾^{ハウンド}＋誘導弾^{ハウンド}」

「まずい、充ー!」

「了解」

両手にトリオンキューブを生成した出水は対象を追尾する誘導弾^{ハウンド}を生成。合成弾による短期決戦を仕掛けるつもりだと考えた嵐山はすぐさま時枝と合わせてテレポートで左右に飛び、アサルトライフルによる射撃を行おうとする。だけどそれが三輪の狙いだった

「なーんてな。そらー!」

「合成しない!? つくー!」

トリオンキューブは合成するのではなく、分割して嵐山と時枝に放ったのだ。ミス

リードされた2人は無数の弾丸にフルシールドで防いだため身動きができなくなった

その隙に木虎を狙いに行った三輪。振り下ろされる弧月をスコープオンで受ける

「つはあー！」

「っ！」

力任せに押し倒すのもありだが、敢えてそうせず。三輪は片手を離し、代わりにハンドガンを取る。それに気付いた木虎もやられる前にやろうと改造ハンドガンを向ける。瞬間、同時に引き金を押し込んで撃鉄が雷管に衝撃を受けた音が響いた

「……っく」

「ッフ、外したわね」

木虎の放った弾丸が三輪の腹部に命中。超近距離だったこともあり正確に狙うことができなかった。三輪は外したと思いい、今度はトリオン機関を狙おうとした瞬間だった

「っわ!?…鉛レッドバレット弾!?!」

突然右足が重くなつて体勢が崩れた。木虎の太ももには六角形の鉛が生えていた。敵の動きを重さで制限して優位性を得る特殊なトリガー。てつきり通常弾アステロイドだと思つていたため不覚を取り倒れたところで今度こそ三輪が弧月で切ろうとする。だがそこへオペレーターから通信が来る

『三輪くん避けて！ 敵の攻撃が来るわ！』

『藍ちゃん逃げて!』

嵐山隊のオペレーターあやっし はるかの綾辻遥と月見が同時に知らせてきた

『木虎、後ろだ!』

嵐山の言葉で後ろを見た木虎は見た。ブーメランのように何か回転している物が飛んできているのが。だが木虎は鉛レッドバレット 弾レッドの所為で機動力は下がっている

「つつ…なん…で…?!」

「木虎を攻撃した…? 玉狛の味方じゃないのか?」

木虎はシールドを2枚張って防御することにしたが、当る直前で回避するような動きをして胴体を真つ二つにした。三輪はタイミングを合わせて跳ぶことで回避した

不思議な動きと味方じゃなかったのか? とすぐには理解できないようなことが起きてこの場にいる全員が固まった

「一人しか倒せなかったか…まとめやられてくれたら楽だったのに」

木虎を緊急脱出ベイルアウットさせた凶刃は奥へ飛んでいき、角から現れた澄人へ戻っていった。全身に傷ができていて誰もがあと少し攻撃すれば倒せるんじゃないか? と考えるほどだった。一番損傷が大きい背中も今はトリオンの流出が止まっている

その予想は当りで、澄人は後1人か2人倒すのが限界だった

「清瀬さん!」

「な、んで…アンタが…?」

姿を見た嵐山はC級時代にお世話になった人が現れたこと、三輪も同じだったが玉伯の味方をすることに疑問があった

「久しぶりだね嵐山くん、と………三好くん?」

「三輪だ。なぜ……近界民^{ネイバ}を守るんだ!?! アンタは本部の人間だったんじゃないのか!?!」

嵐山はテレビでも出ているし、部隊名にもなっているから覚えていた。だが三輪に聞いている澄人の中では沢山いた隊員の1人、って程度の認識しかなかったのでした。三輪はボーダーに入隊してから経験があるからとトリガーの指導や訓練をしてくれた澄人を少なからず慕っていた。本部に行けばよく見かけていたから、派閥があると知ってからは本部側の人だと思いついていた。その為こうして敵として立っていること、玉伯の味方をしていることに苛立っていた

「ああ、三輪くんか。ごめんごめん……っ!」

名前を間違えたことを謝ると、脚に力を入れて一気に距離を詰め寄った。振り下ろされる雅臥^{まさがお}衾^{がね}を弧月で受け止めた

「っ!………答えろっ!! 清瀬さん!」

何がしたいのか？ 何のために近界民ネイバを助けるのか？ 理解できない三輪は澄人に答えを求めた

このままでは嵐山や出水に攻撃されるかもしれない。風間のように地面を通して攻撃してくる可能性もあると考えた澄人は距離を取った

「オレは……玉狛の人間だよ。今も昔も……近界民ネイバは友達になれる相手だと思っている」
「っ……友達だと……？ ふざけたことを言うな!!」

自分も確かめるように落ち着いて三輪の言葉に答えた。口の中が甘くなつたことで澄人は安心した。近界民ネイバには確かに酷い目に遭い、簡単には癒えない傷も負わされてしまった。けれど澄人には自身に近い考えがあつた

それは近界民ネイバは自分たちと同じ人間であるということ

親切な人、意地悪な人、尊敬できる人、戦いが好きな人、正義に溢れる人など様々な人がいる。ミデンミデンでも同じ人でも人種、考え、信仰、文化、家庭によつてそれぞれ違つた人間へ育つ

あちら側の人たちを近界民ネイバと言つて一括りにして悪と定めるのは一方的。澄人はその考えには納得はできなかつた。だから三輪たちの敵としている

嵐山は忍田本部長の命令によつて玉狛の味方をした。だが澄人にはそんなことなんて関係ない。雅臥まさかね祢を嵐山へ突き出した

「清瀬さん。嵐山隊は忍田本部長の命令で玉狛の加勢に……っ!？」

「関係ないよ。たかが近界民1人が来た程度で同じ組織内で喧嘩なんて……馬鹿馬鹿し
っ!」

間一髪でレポートで回避に成功した嵐山。味方のはずなのに攻撃したことに三輪も出水も驚いていた

「たかが……だと? 馬鹿馬鹿しい……? ふざけるな!! 近界民は危険な存在だ!!」

最愛の姉を失った三輪にとつて澄人の考えも行動も理解しがたいことだった。近界民は恐ろしい人の心を持たない怪物としか知らない。人の姿をしていたところで、姉を失ったことによる怒りや憎しみが薄れることなんてない

危険な猛獣を檻に入れて安全の確保。脱走すれば捕獲か殺処分なのは当然のこと。近界民に対しても同じで、始末して安全を確保するのは当たり前なのが三輪の考えだ

後ろで黙って聞いていた出水は水と油みたいだなと、そんな感想を抱いた。このまま話していても埒が明かない考え、戦闘を再開しようと攻撃態勢に入ろうとした

「三輪。どつちにしろそいつは敵なんだろう? だったらまとめて倒してしまえば、うわ、ちよ!？」

瞬間、出水を囲うようにエスクードが出現した

「なにっ!?! しまった!」

話しながら澄人はこの場に残っている4人のポジションを確認していた。嵐山と時枝と三輪が万能手、出水が射手であることをサイドエフェクトで探り当てた。近中距離どちらも対応できる万能手は厄介ではある。けれどそれ以上にいまこの場では射手が脅威だった

万能手が1対1で相手をしているときに、もう片方を弾幕で援護して抑えたりダメージを蓄積させることができれば十分役割を果たしていると言える。しかも弾丸系を持つていない澄人にとつては数と面積で攻められるのは避けたいところ。だから最初に出水を狙いに行った

閉じ込められて上しか逃げ場がない。当然、出た瞬間に狙われるというのが分かっている出水は動けなかった

横を駆け抜けて行った澄人を三輪は追いかけたら、突然身体を反転して雅臥衿を横薙ぎに振った

「つく!?!」

急な攻撃に態勢が整わなかった三輪は弧月を縦に持つて防ぐも扉に叩きつけられた。澄人は出水を狙いに行くも、視界の端で三輪がハンドガンを抜くのが見えた。その程度ならシールドで十分と背中中に張った。だがそれが間違いだった

「っ!?! おもっ!?! え、何コレ?」

駆けている途中で雅臥^{まさかね}祢と右腕と腹部が急に重くなり、前へ落ちるように倒れた。シールドで防いだはず、と身体を見れば鉛^{レッドパレット}弾の重石が腕に2つ、雅臥^{まさかね}祢に1つ、腹部に2つ生えるようにして付いていた

全く知らないソレに澄人は困惑した。動きを封じる、もしくは制限させるトリガーなのは直感で分かった。だが分からなかったのはシールドで防げなかったということだった

シールドには干渉しないという仕組みは容易には解明できない。色々と考えては全てがハズレの苦味しか反応しない

「これでアンタはもう自由には戦えない。大人しく捕まって……！ なんのつもりだ嵐山隊！」

ハンドガンをホルスターに挿し込んで弧月でトドメを刺そうとした時、嵐山がスコーパーで斬りかかり、三輪はそれを躲した

「清瀬さんは玉狛の味方だ。ならオレたちの敵じゃない」

「悪いけど、オレはどっちの味方でもないよ」

澄人を守るように間に嵐山は立つ。ただどはじめから組織同士で争ってる奴ら全員を倒すつもりでできた澄人は、トリオンのブレードを出して嵐山を攻撃し始めた

「つく、清瀬さん!!」

後退しながら時枝と一緒にブレードを弾いたりして凌いでいた。その隙に三輪は動こうとするが新たに増えたブレードに動きかけた足を止めた

「2本だけじゃないのか!？」

新たに2本が追加されて弧月で防ぎ、レッドバレットで狙うもシールドと同じ干渉することなく通り過ぎた

オペレーターの見えもしかしたら今がチャンスかもしれないと思い、出水に通信を繋げて指示を出した

『3、2、1……今よ!』

カウントダウンが終わった直後に出水は弾丸を射出。自身にもダメージを負わないようにしながらエスクードを削り、破壊すると残りの弾を一斉に放った

「つな! シールド!」

まさか内側から破壊するなんて無茶苦茶な突破法を予想できなかつた澄人は驚いた。咄嗟にシールドで防ごうとした。だけど出水が放った弾は石がガラスに投げたようにシールドが砕けた

「つは!?!……アステロイド……通常弾じゃ、ないのか……?」

2枚目のシールドはないため被弾してしまった

出水が放ったのは通常弾同士の合成弾、ギムレット徹甲弾だった。合成弾はたまたま出水が発見

したものだ。たため、引退した澄人が知るはずもなかった

「嵐山さん！」

「助かった、充！」

弾丸は嵐山のほうにも飛ばして、時枝がシールドで守ったため被害はなかった
「はっああ!!…!?!」

トリオンブレードも消えて自由になった三輪は弧月を澄人に突き刺そうと接近した
レッドバレットで思うように動けない澄人は、雅臥^{まさがお}祢^ねを握るが、ソレにも重石は付け
られている所為で振るのが遅かった。ならばとシールドを張ろうとするが、澄人のトリ
オンは限界に来ていたようでトリオン体にヒビが入った

数度の戦闘とダメージによるトリオンの漏出によつて残りがもうなかったのだ

5話 終わりど、罪の味

「つく、あと少しで…?」

あと少しつて所で直接トドメをさせたのに、それができなかつたことに三輪は悔しさを感じていた。けれど握っていた弧月が何かに刺さつたような違和感を感じていた

アスファルトにでも刺さつたのだろうと思ひ、抜こうと手に力を入れて動かした瞬間、苦痛に叫ぶ声が響いた

「つつ……つあああ……つがつああ……ツツあ」

「清瀬さん!?!」

トリオン体が破壊されたことで広まつた煙が晴れていくと違和感の正体が判明した。弧月の切つ先がアスファルトではなく、澄人の右肩に刺さつていたので

驚いた三輪は慌てて引き抜いた。痛みで肩を抑えても真つ赤な液体が服にジワジワと広がつていく

「つ……な、なんで緊急脱出ベイルアウトしないんだ…?」

「つつ……!!……そんなの……オレのトリガーは、昔のままだから……だよ……っ!」

トリオン体が破壊、またはトリオン切れで解除されると緊急脱出ベイルアウトする、というのが所

属する隊員たちの常識。むしろそれしか知らないから、脱出機能がない澄人のトリガーは解除か破壊されればその場で生身の身体に戻る

「三輪くん……分かるかい？ 奪われたから……相手に同じことをする、つてのは……つ、オレみたいに痛みを苦しませる……つてことなんだよ？」

「つ……だけ……だから……黙って耐えろ……つて言うのかよ！」

肩の周りの神経が寒さで冷えて少しずつ感覚が鈍くなつていく。喋るだけの余裕ができた澄人は復讐をやめるさせるための説得を考えた。三輪の決意が固く失敗になつたとしてもそれは仕方ないことだとも思った。大切な人を奪われ、失う痛みや苦しみは知っているから。行き場のない怒りを溜め込んでおくのも苦しいつてことも

「そう、は……言わない……けどね、どんな理由でも……結局は人殺しに、なるんだつ」
復讐を止めさせたい。けど、やりたいのなら止めない。矛盾をするような思考の答えはどこにもない。自分が答えの行き先を決めなければ止まることがない。だから澄人は三輪の復讐を無理にはとめようとしな

警戒区域に残された僅かな街灯が傷を抑えている手を照らした。鮮血が反射して光ります。それを見た三輪は揺らいでしまった。いつか近界民ネイバーに復讐をするという覚悟が、怒りの矛先が。今まで他人に傷を負わせてきたことがないからというもある。真つ当に生きていれば誰かを傷つけることなんてない。だが三輪はボーダー隊員だ。

ランク戦でも今回の戦いでも、手にしている弧月で幾度となく人を斬ってきた。けれどそれはトリオン体だから。斬っても流れるのはトリオンだけ、倒しても死にはしないという安全があるから

「話の続きはあとにしよう。今はこの人の手当が先だよ」

時枝の言葉にまずはそれをすべきだったと気付いた4人。嵐山が背負って本部へ急行した。途中、違う方面から緊急脱出（ベイルアウト）の光が2つほど飛翔した。太刀川と奈良坂が倒されたのだ

ボーダー本部基地 会議室では入っただけで分かるほど室内の空気がピリついていた。もしかしたらどこからか見えない針でも飛んできそうなほどに

原因は今回の争奪戦に関して。忍田派の嵐山隊が玉狛の味方をしたことだった
ボーダーには大きく分けて3つの派閥が存在していた

1つは「城戸派」

（ネイバー） 近界民は絶対敵として考えている

1つは「忍田派」

（ネイバー） 近界民が敵かどうかよりも街や民間人の安全が最優先である

最後は「玉狛派」

近界民^{ネイバー}とも親しくする友好的な派閥。城戸派とは真反対な考えのため事あるごとに牽制や圧力をかけられている

しかもブラックトリガー風刃を所有しているため、今回の遊真のブラックトリガーも合わせて無視できないほどバランスが崩れた。そこへ忍田派が加わった。本部隊員1／3を占めるため戦力的にも城戸派が劣勢になった

「ならば仕方ない。次の刺客には天羽^{あもつひ}を使おう」

「っ!？」

「なっ!？」

これ以上遊真を狙い続けるのならと、忍田本部長は自身が相手をすると言った。それに対して城戸指令はブラックトリガーを所有するS級隊員・天羽^{あもつひ}月彦^{つきひこ}を刺客として使用することを告げた

だがコレにはさすがに城戸派である幹部たちも戸惑いがあった。天羽のブラックトリガーは圧倒的な強さを誇るが、その戦う様は表に出せないほど問題が多く、広報の根付がボーダーのイメージが下がってしまうと苦言を呈した

「A級トップを相手に1人で倒す迅に、忍田本部長が加わるとなれば手段を選んでいる場合ではないだろう?」

ボーダーのイメージはある程度悪いのは理解している。それでも成り立っているの

は日々の防衛による街の安全と、近界民^{ネイバー}は敵として掲げていることだった

4年半前の侵攻で無事だった人も傷を負った。トラウマを抱えてしまった人だっている。近界民^{ネイバー}と戦う組織として成り立っている以上、多少街へ被害が出ようとも排除できるのなら構わないという考えだ

後の会見などで施設の一つを隠れ蓑にしたとか、そこにいる職員たちを洗脳して操っているなどと言えば風評被害は幾らか回避できる

強引だとしても、もし天羽が出ることになればそう対応するしかないのだ

「で、ですが…問題はもう一つ、あの清瀬くんの介入も」

「問題あるまい。怪我をして今はこの本部基地にいる。記憶処理してしまえば次はないだろう」

根付はもう一つ、危惧していることがあった。それは澄人だ

未確認のトリガーを使用して戦闘に介入した。A級数名を相手に孤軍奮闘して任務遂行不可能までに追い込んだ

けれど鬼怒田が問題ないと言った。三輪の弧月により負傷した彼は現在本部の医務室で治療している。そのまま記憶処理をして今日のこととは無かった事にすれば、次も介入することはないと考えていた

現に一般人のトリガー所持、使用による戦闘行為、ボーダー隊員への攻撃、警戒区域

への不法侵入など言い訳もできないほどに罪があった

「失礼しまーす」

会議室が更にピリついた空気になり、内部分裂が起こってもおかしくなさそうになったところで扉が開き、陽気な口調で人が入ってきた

「ドーもみなさんお揃いで。会議中にすみませんね」

その人物は迅悠一。今回争うことになった原因の1人だ

迅がこの場に來たのは交渉をするためだ。わざわざこのタイミングで？ と根付たちは理解ができず、もしかすると全面戦争するための宣戦布告にでもしに來たのかと考えた。けれどそれはちがう。唐沢は瞬時に理解した。A級トップチームを撃退し、忍田派と手を組んで戦力的にも勝った。だから今が交渉をする絶好の機会だと

「こちらの要求は二つ。うちの後輩、空閑遊真のボーダー入隊。2つ目は清瀬さんの復帰を認めていただきたい」

「なに…？ どういうことだ？」

入隊と復帰。どうしてそんなことを求めるのか鬼怒田は分からなかった。仮に2人をボーダーを入れたところで得をするとも思えなかったからだ

それに答えるように迅は言った。ボーダーの規則で仮入隊の間はボーダー隊員ではないと。これの補足をするように唐沢が、ランク戦以外での隊員同士の争いを禁ずると

いう項目を盾に守ろうとしたいのだろうと言った

「私がそんな要求を飲むと思うか？」

「もちろんタダでは言わないよ。代わりにこっちは風刃と、清瀬さんが隠し持っていたブラックトリガーを出す」

「……っつ！？」

迅は近界民^{ネイバー}を敵として見ている城戸指令の首を領かせる為に用意をしていた。それが風刃と、ネットクレスの形をしたブラックトリガーだった

これには全員が驚きを隠せていなかった。というよりは驚かざる得なかった。風刃を差し出したことも当然だが、澄人がブラックトリガーを持っていたということが一番大きい

「な、なぜ彼がブラックトリガーを!？」

「もしかしてさっきのあのトリガーか!? だがそれじゃボーダーのトリガーを使ったことがおかしい!？」

「………迅。どういうことだ?」

動揺する幹部をよそに城戸指令は問い掛けた。なぜ、澄人が持っているのか?と

「5年前だよ。あの日、清瀬さんはブラックトリガーを入手したんだ。製作者は行方楓けど清瀬さんは使うことができなかった。だから自分のトリガーで戦ったんだよ」

迅は見ている。サイドエフェクトで行方が作ったブラックトリガーを手にして泣くのを。そして、その先の未来で澄人を助けるために存在しているのを

本部の医務室で治療を受けていたところを迅が訪れ、常に肌身離さず持っていたブラックトリガーを譲ってもらおうように頭を下げた。5年の歳月もあれば未来視のサイドエフェクトがどういふものかが理解していた。正解かどうかは分からなくても、澄人はこうして戻る決意をしたこと、戦うことになること、行方が作ったブラックトリガーが必要になることが用意された未来なんだと

だから澄人は言った

「…迅くん、ボーダーのため…だったらいいよ…きつと楓ちゃんもそのためなら許してくれると思うから」

想い人が遺した物を手放すのは寂しい。けれどボーダーが変わってしまったこと、ほうがもっと悲しい。あの頃には戻れないと分かっているも澄人は昔のボーダーが好きだった

だからと言って澄人はボーダーを変えようとは思っていない。それはするべきでない、する資格がないのだ

多くの仲間を失い、こちらの世界にも多くの人たちが死んでしまった。こうなってしまうのはボーダーが存在するためには、存在理由を大衆に認めて支持してもらえないよう

にするしかないのだ。「近界民^{ネイバー}を排除すべき敵」として

「分かっているよ。清瀬さんがどれだけみんなのことが好きだったのか、オレはわかっているから。んじゃ！ あとはこの実力派エリートが解決してくるよ」

切磋琢磨しいい、同じ釜の飯を食べ、怒られたり喧嘩したり、世界を守るための組織だというのに家族や親戚の集まりみたいな光景は、まさにテレビのヒーローが基地で仲間たちと過ごす時間のように思えた。だから澄人は、ボーダーが好きだった。オレも、ヒーローの一員なんだって思えたから

澄人の想いと一緒に受け取ったブラックトリガー。それを躊躇いもなく出す

幹部たちはこの交渉は利益が大きいと考えた

遊真が持っているブラックトリガーと秘匿所持していたブラックトリガー。この2つは適合者がいるかどうかも分からないためどの程度の価値があるか不明だった。けれど風刃は違う

かつて適合者多数いたため、その人たちで争奪戦を行ったことがあった。結果は迅の勝利。その日から今日まで所持し使用していた。だがそれを今度は手放す。再び本部の管理下に戻るということは戦力が増し、もし遊真が問題行動など起こせば風刃を持たせて対処することができる

しかも攻撃手^{アタッカー}1位の太刀川を退けたということは、単純にそれだけ高性能だという

「箔」も付与し風刃の価値を高めた。ノーマルトリガー最強の忍田本部長を除いた最強の隊員を倒せる、と

本部にとつて価値の大きい交渉。調査しなければ不明だが澄人が持っていたブラツクトリガーも合わせて2つも得る。玉狛は1つ手放し戦力が減少。おいしい交渉に幹部たちは城戸指令に受けるべきだと言った

そして、考えを纏めた城戸指令は答えた

「……いいだろう。空閑遊真の入隊を許可する。ただし、清瀬澄人に関しては——」

「はい、骨が少し切れているからできるだけ動かさないように」

「ありがとうございます」

傷の手当が終わり、痛み止めの薬を受け取ると帰ろうと医務室を出ると、壁にもたれるように三輪が待つていた

「あれ？ 帰らなかつたの？」

「……どうしてアンタは……近界民^{ネイバ}を信じられるんだ？ 奴らは、オレたちから大切な物を奪っていくんだぞ？」

怪我をさせたことを謝りに待つていたのかと考えたがそうではなかつた。最愛の姉を殺された三輪にとつて近界民^{ネイバ}は恐ろしい敵でしかない。だから迅や澄人のように

近界民^{ネイバー}を信じ、守ることが理解できなかった

「そうだな、近界民^{ネイバー}は恐ろしい敵でもある」

「だつたらなんで!？」

「そんなの人だからだよ？」

「それが、なんの關係が…?」

澄人にとつても近界民^{ネイバー}は敵である事は理解している。けれど同時に敵でもない。矛盾した考えだけれど、しっかりと言葉を交わし意思疎通ができる相手だと知っている。事実、玉狛には協力してくれてる近界民^{ネイバー}がいて、一緒の時間を過ごしたことだつてあつた

雅臥^{まさがね}だつて我侬を言つて作つてもらつた。時折意地悪だつてされる。けれどそこに悪意はない。学校のじやれあいのようなものだ

「だから近界民^{ネイバー}は敵でもあれば味方。友達や仲間になつてなれる」

「そんなの……いつか裏切られるにきまつてる…」

「まあ…確かにそなるかもしれないね」

三輪が復讐をしたのは知っている。けれど誰を失つたのかは澄人は知らない。分かるのは余程仲がよかつたということだけだ。仲間を失つた澄人にもその気持ちは痛いほどに分かる

「けど、復讐をするってことはな……人を殺すってことなんだよ？ その意味はわかっているの？」

「そんなの……当たり前だ。やられて当然のことをあいつ等はしてきたんだ！」

やられたらやり返す。まるで子供の喧嘩論だなど思った

「三輪くん……オレもさ、復讐はしたことがあるんだよ」

「……え？」

「さっきの、迅くんに渡したブラックトリガーを作った子が好きでね。殺されたと思つたとき、どうしようもない怒りと殺意でいっぱいになって……気付いたら四肢を切り飛ばしてて、痛いって、助けって泣いてる姿見て、オレは知ってしまったんだ。1人の命を奪ってしまったことに」

「つ……だから、なにが言いたいんですか？」

澄人にとって好きな人が殺されたのだから、その近界民ネイバーは殺されて当然だとも思つた。だが、その時を語る澄人の顔は悲しく罪悪感を感じた表情をしていた

復讐ができてよかつたじゃないか、と口にすることをしなかつた。してはいけないと三輪は感じていた

「どんな理由があつてもな……結局は人殺しでしかないんだよ。近界民ネイバーかどうかなんて関係ないよ」

「それでも…あんたは、まだ近界民を、信じられるのかよ……」

「ああ。近界民はオレたちと何一つ変わらない人間だ。だから話したり、理解だってできる。許すことも許されることも」

この世界において澄人は罪人ではない。けれど命を奪ったことは事実。そこに理由があろうとも「人を殺す」という行為が正当化されることもないし、澄人自身もしてはならない一線を越えてしまったことを自覚している

罪の意識を忘れずいるためにも、行方のブラックトリガーを持っていた理由のひとつだった。5年の月日が経てば精神的にも落ち着いて整理だってできた。だからあの日のことを思い出しても震えることも怯えることもなくなつたし、こうして戦いに復帰できる程度に覚悟もできてきた

「城戸さんも、忍田さんも、迅くんも、林藤さんもみんな…大切な仲間を失って近界民が恐ろしい相手だつてことは知っている」

「っ!？」

「道は違えたけど…それでも玉狛に残ったメンバーは近界民のことが好きなんだよ」

三輪は玉狛にいる人たちは近界民の恐ろしさを知らない。大切な人を失って傷ついたことがないんだと思ひ込んでいた。けれど違うと知った

玉狛支部の全員ではないにしても大切な人たちを失う悲しさを経験している。それ

でもなんで、まだ近界民ネイバーのことを信じられるのか？ 三輪は理解に苦しんだ

澄人は話が終わると帰ろうと止めていた足を動かすが、三輪の横を通ろうとして止まった

「あ、そうだ。はい」

「……これは？」

「ラムネ。あげる」

ポケットから緑色のプラスチックの容器を取り出して三輪に渡した

「……いいじゃない、そんな気分じゃ」

「いいからいいから、まだいっぱい持つてるから」

なんでラムネ？ と三輪は困惑してから返そうとする。でも澄人はポケットからさらに6本も未開封のラムネを取り出した

「あ、コーラ味がよかった？ それともブドウ？ ソーダもあるよ？」

三輪に渡したのは至って普通のラムネだけど、もしかして他の味がよかったのかと次々と渡した。徐々に顔が険しくなっていくのを気付きながらも、敢えて無視した

「じゃあ！ 手持ちはそれだけだけど店に来れば沢山あるから！ ついでに売り上げにも貢献してくれ！」

結局全部あげて澄人は帰っていった

「くくッッ!!」

一人残された三輪は無理矢理持たされたラムネを見つめて苛立っていった

最終話 夢の一步目の味

数日経って21日の今日。澄人はいつものように開店準備のためにシャッターを上げた。珍客が来ていた

「つしよ……つうわ!? 城戸さん? いつから」

「いま来たところだ」

開けたら目の前に誰かが立っていれば驚くのは当然だ。たとえ知り合いだったとしてもだ

「入ってもいいかね?」

「……来るなら開店してからにして欲しかったですけどね」

ずっと外に立たせるわけにもいかなかったため、仕方なく店内に入ることを許した

澄人は並べる必要がある商品を見て、奥から大きな籠に入れて戻ってきた。しばらく無言で作業をしていくが、先に澄人から話を切り出した

「わざわざ城戸さんが来るなんて、もしかしてこの前のことそんなに怒った? だったから記憶処理は閉店後でいい?」

「君が参加したことには驚いたが、記憶処理に関しては今は考えてはいない」

「ん？ どういうこと？」

ボーダーの指令が直々に来るなんて相当怒りを買ってしまったんだと澄人は考えた。それもそうだろう、引退した一般人がトリガーを持つて戦場に戻れば驚きもするが、任務の邪魔をされたと説教や文句の一つでも言いに来るのは当然だ。加えて一般人が警戒区域に入るだけでも記憶処理の対象になるのだから、そのお迎えにでも着たと思つていた。だが返ってくる言葉は予想に反して違つていた

「これは？ ボーダー……入隊申請、書？」

「君の事に関しては色々問題はあがあるが、ブラックトリガーの献上とボーダーの戦力増強のほう利益が大きいと判断して復帰を許可する。だが、違反行為の数々からそのまま復帰させるわけにはいかないため、C級隊員からやり直してもらう」

「あ……なるほど。そういうことか」

ブラックトリガー争奪戦の日の会議室。迅の交渉により遊真の入隊が認められ、澄人の復帰も無事に許された、というわけにはいかなかった

ブラックトリガーでもないのにA級数名を退けた澄人の力は想像以上で、いずれ来るであろう大規模侵攻を考慮して戦力の確保をするためにボーダーに入れておきたい。けれど嵐山隊も巻き込んで暴れまわったり、トリガーの所持など違反の数々から城戸指令はC級隊員からの再スタートならばと許可した

「君のトリガーは正隊員になってから持つことを許可する。それと―」

「ん？ ほかにもなにか？」

「緊急脱出を装備したトリガーに雅臥^{まさがお}衿^{がね}を移したまえ」

「あー…そうだね。うん…：…めつちや痛かった…：…みんなも、あんなに痛かったのか
な…」

「本部未承認のトリガーをC級が持つわけにいかないため、再び雅臥^{まさがお}衿^{がね}を持つときは
緊急脱出^{ベイルアウット}を装備したトリガーに、と城戸指令は言った

確かにそのほうがいいと澄人も納得した

初めて感じた痛み^{ベイルアウット}に澄人は、死んで逝った仲間たちのほうがもつと辛かったんだろな
と声を低くして言った

「……………」

城戸指令は何も返さなかった。その通りかもしれないし、そうだったとしても死ぬほどの痛みを経験はしたことがないため言えなかった。代わりに顔にできた目立つ傷を触った。一瞬なにか起こったのかわからなくなるほどの激痛。今は痛みが無くとも、城戸指令は忘れずに覚えている。近界^{ネイバー}民への憎しみを忘れぬために

「……………今書くから少し待って」

レジに座って申請書に必要な項目を書いていく。氏名、年齢、性別、住所など埋めて

いくと最後にサインが必要になり部屋で印鑑を取りに行く

ケースに付いている朱肉でインクを移して判を押す

「よし、書いた……城戸さん？」

書類ができたから城戸指令に渡そうとしたら、半分も埋まるほど商品を詰めた籠が置かれた

以前来たときはただ邪魔をしてしまったから、今度は客として来た。申請書はついでということにして

「……まあ買ってくれるのは嬉しいんですけど……客として来るならせめて、開店してからにしてください」

「無論、次からはそうするつもりだ」

本部へ向かう前に澄人の入隊申請を割り込ませるために開店前に来たのだ理由だ

店側としての文句は言いつつも、大量に買っていつてくれるのでしつかりとレジのテナキーを打って値段を入力していく

会計を済ませると澄人はまだ未開封の駄菓子チョコ饅頭も入れようとした

「それは買っていないが？」

「ん？ サービス。それに、城戸さんコレ好きでしょ？ 玉狛に持っていったらいつも

コレ食べてたじゃん」

まだみんなと楽しく過ごしていたとき、差し入れて店の商品を持って行く事をたまにしていた。その時、城戸さんは毎回マシユマロに包まれたチョコのお菓子をよく食べていた

ソレを思い出した澄人は箱ごと上げようとしたのだ。もちろん商品としてあげるが、支払いは澄人だ

「……そんな昔のこと、よく覚えているな。だが箱は要らない」

まさか気付かれていたことに、覚えていたことに城戸指令は驚いたが。さすがに好きだったことまでバレているとは思わなかった

結局、箱ごとは多すぎるからと10個だけにした

「それじゃ、家のこと頼むな」

「いいけど、本当に大丈夫？」

「大丈夫だよ。久しぶりに仲間に会いにいくだけだから」

店も閉めて夕ご飯も食べた澄人は大量の荷物を持って、家のことを妹の舞に任せて出かけた

「にしても玉狛に行きたいから迎えに来てって連絡来たときはどうしたのかと思っただぞ？」

「しようがないじゃん。片腕じゃ運転できないし」

表で澄人を待っていたのは林藤支部長だった。肩の怪我は大分よくなっているけれど、運転するには首から提げてる包帯が取れてからだ。そのため荷物を持って玉狛支部に行くには誰かに迎えに来てもらう必要があった

「今の玉狛はどう？ 人って増えたの？」

「ああ、結構増えたぞ。つつても、前ほどじゃないけど」

揺れる車の中で今の玉狛のことを澄人は知れたかった。覚えている限りじゃ残っているのは5人。林藤支部長、ゆり、小南、木崎、迅たちだ。そこから7人も増えたという。澄人も加われれば合計で13人になる

城戸指令、忍田本部長、桐山は本部へ移籍した。少し寂しいなと思うものの、それぞれの業務を考えれば支部より本部にいるほうが都合が良かったため仕方ない

しばらく車が走ると目的地の玉狛支部に到着した

玄関を開けて中に入り、ダイニングルームに行くのにぎやかな声が聞こえてくる。澄人は少しだけ昔みたいだなと懐かしさを感じた

ドアノブを掴んで扉を開けると、賑やかだった空間が静まって全員が澄人を見た
最初に声を出したのは小南だ

「な、なんでアンタがいるのよ!？」

「いちや悪いか？ 古巣に戻ってきたというのに」

指を指して信じられない様子で澄人がいることに驚いた。もう戦いたくないと、そう言つて玉狛を去つて行つた男が居れば驚くのも当然だろう。木崎もいつもより目を見開いてしばらく声を出すことを忘れていた

「烏丸先輩、あの人は？」

「いや、オレも知らない」

三雲修は師匠である烏丸京介に問い掛けるが望むような答えは来なかつた

「あー、確かに増えてるな……なら自己紹介しとくか。はじめまして、オレは清瀬澄人。桐絵ちゃんやレイジと同じボーダーの古いメンバーだ。今は駄菓子屋の店長だけど、今度からボーダーに戻ることにしたからよろしくな」

2人の会話を聞いて自己紹介をする必要もあるなと思ひ、簡単に名乗つた

澄人が戻ること三雲は一度辞めたんだと気付くと、当然「何故辞めたのか？」が気になった。けれど聡い三雲は恐らく容易に踏み込んで失礼だろうと口にはしなかつた

他に復帰することに驚いたのは小南だつた

「つは!!? 弱虫のアンタが戻る!!? なんで今更!」

「弱虫つて……色々あつてな。それに……考えや心の整理もできたから」

「だからって……部屋で閉じこもってたアンタが戦えるわけないでしょ！」

5年前のアリステラの救援に行つて経験した戦いで、澄人は傷を負い戦いから逃げるようになにもしなくなつた。それを小南は弱虫だと、そんなんで逃げるならボーダーにならなければよかつたのに、と思つていた。だから澄人が戻ると言うことに反対でもあつたし納得ができなかつた

整理ができたからって、何故今更なんだと

「それより」

「それよりじゃないわよ！　ちよつと！」

小南が怒るのも分からなくもない。あんな思いをしたくないなら戻らなくてもいいと、暗に言っているのを澄人は気付いていた。騒がしい子なのは変わらないが、仲間思いの子のままできてくれたのは嬉しいことだつた

小南の文句よりも澄人は知りたかつた。現在の玉狛にいる人たちを

「こいつは烏丸京介。オレのチームにいる」

「はじめまして。烏丸です」

黒髪がふわふわしている烏丸をレイジが紹介した。その次はオペレーターだつた

「どーもー！　敏腕オペレーターの宇佐美葉です！」

メガネを掛けた黒髪の女性が宇佐美葉。木崎隊のオペレーターを勤めていて、かつて

はステルス部隊の風間隊のオペレーターをしていたという。その腕前は高いようでもトリガーの変更から、性能を変更したトリオン兵のプログラミング、隊服のデザインなど幅広い

そんなオペレーターをよく引き抜けたなど澄人は驚いていた

「僕は三雲修です」

「雨取千佳です」

「空閑遊真。よろしく」

「空閑……？もしかして有吾さんの子？」

次は三雲たちが順番に自己紹介をしてみた。3人目の髪が白い遊真の苗字が「空閑」だと知ると、もしかしてと聞くと口が甘くなると同時に「そうだよ。親父を知ってるんだ？」と答えが返ってきた

「一応、ね……オレは有吾さんとはあまり面識はないけど、近ネイバーフット界に旅に行くって……それつきりね」

多少の剣の手ほどきや、近ネイバー界民の世界の知識や文化など教えてもらったことがある澄人。まさか子供を作っていたなんてことは知らず、遊真がここにいることに驚いていた。だからなおさら先日の争奪戦のことが気に入らなかつた

城戸さんが近ネイバー界民の正体が有吾さんの子だと知ればあんな争いは起こらなかつたは

ずだと

「あれ？　これだけ…残りは？」

「ああ、ゆりとミカエルは県外にスカウトに行ってるよ」

まだ少し人数が足りないなど聞くと2人はどうやら県外へスカウトに行っている
と林藤支部長から教えられ納得した

「あの、その人たちは——」

「ちよつと！　アタシの話がまだでしょ!!」

「……じゃあどうしたら納得してくれるんだよ？」

スカウトに行った2人を知らない三雲は聞こうとするが、小南が声をあげて遮った

「ボーダーに戻るってならあたしと戦いなさいよ！　本当に戦えるならだけど」

「わかった。それで納得するならいいよ」

「……え……？」

小南の中ではトリオン兵相手ならギリギリ戦えるが、人が相手だと何もできない奴、
としか知らない。だから戦いを挑めば澄人が負けて、ボーダーに戻れない。たとえ戦え
ても戦い続けてる自分が強いと自信満々だった

けれど、澄人があつさりと承諾したため少し拍子抜けしてしまった。対人は辞めてほ
しいとばかり言うのだと考えていたから

「どうしたんだ？ 桐絵ちゃんとか戦って勝てばいいんじゃないよ？」

ブラックトリガー争奪戦の件を知らない玉狛メンバーは、澄人が人を相手に戦えられるように回復していることを知らない。知っているのは迅と林藤支部長だけだ

「そ、そうだけど…あ、あんた本当に戦えるの!？」

「ああ、大丈夫だ。今日は、当たり前だから」

「つつ…いいわよ！ こてんぱんにしてやるわよ！」

戸惑いでやせ我慢をしているんじゃないかと考えるも、澄人の口から「当たり前」と出るとそれは虚勢でもなんでもなく、本当に戦えることを示していた

澄人のサイドエフェクトは知りたいことに対して当たりかハズレを味覚で判断する。ただ、ハズレのときに嘘と本音が違いすぎるほど苦味は増していく

小南の予想は余程苦くて演技で取り繕うことができない。だから表情が歪むと思っていたのに、澄人の顔は当たりを引いた甘くて嬉しそうだったのだ

本当に戦える。ならば攻撃手アタッカーランク3位の実力を見せ付けて倒してやる。小南はもうその考えしかなかった

四方と上下に真四角な白い空間、訓練室として設置されている部屋に澄人と小南は立っていた

「10本勝負でアタシに勝てたら認めてあげなくは無いわよ！」

「あはは、随分甘く見られたなー」

二人はトリオン体に換装しており、それぞれ武器を手にした

『それじゃ、始めるぞ……始めっ！』

木崎の声スピーカーから聞こえ、バトル開始の合図が告げられるた

最初に動いたのは小南で、手斧の双月をクロスした腕から広げるようにして風ぐように斬りかかる

澄人は一歩下がリシールドで防御。解除した直後に下から雅臥^{まさがおね}祢を振り上げて反撃するが、それは予想していた小南は後ろへ跳んで回避

追いかけてよとしますが足元に炸裂^{メテオラ}弾の置き弾をされていることに気付いたが遅く、爆発した

下半身が吹き飛んだあと、少ししてトリオン体が再生すると立ち上がる

「驚いたな。置き弾なんて繊細な戦い方ができるようになったんだ」

「当然でしょ！ アンタと違ってあたしたちはずっと戦って強くなってるのよ」

小南の強気の言葉は意地でも思い込みでもなく、磨き上げた技術で裏つけされた強さなんだと澄人は遅れて理解する

加えてトリガーは澄人が知る頃よりも増えている。知らないトリガーを入れている可能性もあると、頭の中に置いて2戦目が始まる

「今度はオレから行くよー！」

「……つく!! あい……変わらず……重たいわね」

前へ跳んで1回転しながら雅臥衿まさがおねを振り下ろす。それを小南は双月を繋げてハルバードに変形させて受け止めた

だが、元から重量のある雅臥衿まさがおねに加えて、オブシントリガーの舞空で下への圧力を強めている

「まあ……ねっ!!」

澄人は舞空の力の方向を変え、同時に持つ手を変えながら身体を回転させて左から横薙ぎに払う。吹き飛ばされた小南は着地するも、回転して飛来してくる雅臥衿まさがおねを弾くことに成功する

「澄人さんは……」

「……ち……よ……と」

弾いたからと言って舞空で制御している以上油断はできず、意識を向けながら澄人を探す。最初にいた位置からはおらず、周囲を見ていなかった。ならば上かと見上げた瞬間澄人が目の前に着地、近距離では繋げた状態は不利だからと分離をするが遅く、腕を掴まれて小南振り上げられた

「つく……ちよ、そんなのあり!?!」

空中ではなす術がない小南は視界が逆さまのなんとか状況を理解をしようとするが、弾いたはずの雅臥衿まさかが接近してきて切り裂いてきた

トリガーを投げ出して投げ技で無理矢理空中に放り出す。こんな無茶苦茶な戦いは初めてな小南は驚きと戸惑いを感じていた

「これで1勝1敗」

「っ……もう勝たせないわよ！」

「そうか？ それはそれで桐絵ちゃんが強くなってるってことで嬉しいんだけどね」

「このっ……」

この男には敗北の2文字がいやじゃないのか？ 疑いたくなるほど負けてしまうことに悔しさを感じさせなかった

3戦目が始まると小南からの先制攻撃

突撃しながら炸裂弾メテオラを放った

「エスコード」

トリオンを物質化し、シールドより強度が上がった防壁を展開して炸裂弾メテオラを防ぐ。爆煙が広がり視界が悪くなるも、追い討ちの炸裂弾メテオラを放つ

回り込んで攻撃しようとしたとき、煙の中から4つの光が見えて飛び出した。トリオンで生成されたブレード「閃剣せんけん」

スコープオンよりは数倍の硬さがあるが、足を止めて双月で器用に弾いていく。それが澄人の狙いだった

「エスクード!? しまった!」

足を止めたことで澄人はエスクードを展開し閉じ込める。いくら高威力の双月でも狭い空間では繋げて振り回すことはできない。逃げ道は上にあるものの罠であるのは明白

炸裂弾^{メテオラ}で自爆覚悟の脱出か、罠を突破するかの2択しかない。だが小南は3つ目を考えた。炸裂弾^{メテオラ}を上空でつくり、澄人がいるであろう周囲に放つ。当ればラッキー、当らなくても逃げる隙は稼げる

そう考えて炸裂弾^{メテオラ}を生成した瞬間だった。それすらもお見通しだったかのように閃剣が刺さり爆発した

「つつ! もー逃げ場が…つつ!」

爆発の影響を受けないように咄嗟に固定モードにしたシールドで防御するが、小南のトリオン体は雅臥^{まさか}祢^{がね}に貫かれていた

「な、んで…なんで刺さるのよー!」

エスクードと固定シールドを突破して小南を倒した澄人。これで2勝目だが、そもそも防御性能が高い2つを貫くことができるなんて強すぎる。なんで突破できたのか小

南は理解できなかった

「なんでって……勢いをつけた雅臥祢まさかねで刺したただけだけど……？」

小南の予想通り囲ったエスクードの近くには澄人がいた。小南が炸裂弾メテオラを生成したとき、周囲を爆破するつもりだと気付き、舞空で後方へ緊急回避していた

間に合えばと閃剣を放ったら当ってその場で爆発。今ならエスクード内にいる小南は動けないから舞空で勢いをつけた雅臥祢まさかねを投げ飛ばしたのだ

「澄人さんて……こんな戦い方してたっけ……？」

「うーん……最近のゲームや特撮ヒーローの影響かな？」

「なっ……ヒーローって……」

力技なようで高い技術をもった戦い方に小南は以前の澄人がこんな戦い方だったかと思いついた。けれどいくら思い出しても雅臥祢まさかねを中心とした戦い方で、武器を手放して戦うような型破りなことではしなかった。舞空は思い雅臥祢まさかねを動かすための補助、閃剣は隙を埋めるためのカバ―

もしかして自分たちが知らないだけで、実はどこかで訓練でもしていたのかと考えたが違った。ゲームや澄人の好きな特撮ヒーローの影響だと言う

つまり、ぶっつけ本番の攻撃に小南は2度も負けてしまったのだ

「なんか……なんか納得できないー!!」

沢山訓練して実力をつけてきたのに、思い付きの攻撃で負けた小南は悔しさに叫んでしまった

その後、残り7試合をした結果

3勝5負け、2引き分けで澄人が負けてしまった

「負けちゃったか…：やっぱ4年のブランクは大きいな。強くなったね、桐絵ちゃん」

「当然でしょ！ でも本当に…：人と戦つても平気みたいだし…：戻つてきても一応いいわよ」

勝つたことに安心する小南だが、序盤の型破りな戦い方には翻弄されていた。しかも4年という時間がありながらも雅臥^{まさかね}の扱いは劣つていなかった

人と戦うこと関しても躊躇がなくなつていた。昔の澄人からは想像できなかった小南は驚きもあつたし、嬉しくもあつた。また、一緒に戦えるかもしれないと

試合の結果からすれば澄人は負けで、復帰することはできないのだが。内容からすれば木崎たちは満足していた。攻撃手^{アタッカー}総合3位の小南にトリガーの更新無しに3勝は大きかった。弟子の遊真もC級トリガーのスコアピオンで3勝するほどなので戦力としては問題ない

そのことも理解している小南は澄人が戻ることを許した

「え、いいのか？ なら遠慮なく玉狛支部^{たまご}に戻ろうかな」

「…少しくらいは遠慮はしたらどうなのよ…」

「いやいや、今さら桐絵ちゃんたちに遠慮することなんてないでしょ？ それに、オレは本部より玉狛たまごが好きだから」

「…っ！ つそ…トリガー、早く新しくしなさいよね。そのままじゃ危ないんだから」
「そうだな…さつ!! 今日店からいっっぱい駄菓子を持ってきたんだ！ 好きに食って楽しもうぜ！」

無事玉狛に戻れることになった澄人は、新しく入った仲間や近界民ネイバーの歓迎や自信の復帰を祝してリビングへ戻った。店から持ってきた駄菓子をテーブルに広げても全部は乗らず1/3はダンボールに入っている

「おい、清瀬…大丈夫なのかこんなに…？」

「ん？ へーき。全部オレの財布から買い取ったから気にしないでくれ」

一つ一つが安いとは言え、数が集まれば駄菓子でも店の経営に響くんじやないかとレイジは不安を口にする。それに対して澄人は平気と答えた

「だが、お前さん。コレだけあると結構な額になったんじゃないのか？ 大丈夫なのか？」

林藤支部長も心配していた。自身の財布から買ってといつても総額5000円はいくだろう。駄菓子屋ん経営は厳しいだろうから、遊ぶためのお金を使ってもいいのかい

配になつていた。いざとなれば玉狛支部の経費として買い取ることも考えていたが、それは杞憂だった

「実はな……」

「な、なんだ……?」

「副業でもしてんのか?」

2人にだけ聞こえるように声を低くして澄人は答えた

「競輪で儲けてんだ」

「……」

「………おまえ、そんな趣味があつたのか?」

競輪で儲けてる。澄人は確かにそう言つた。レイジはまさか博打していたことに驚いて言葉が出ず、林藤支部長は呆れていた

「儲けてるといっても舞の学費や生活費、店の経営に必要な分だけだけどね」

日々近界民ネイバーが襲つてきてる三門市に引つ越してくる人は余程な理由があるくらいだ。反対に出て行く人はよくいる。危険な場所から遠ざかろうと考えるのは当然の心理だ。そして人が減ると言うことは店の経営などが減少していくことになり、閉店するところも珍しくない

澄人が継いだ駄菓子屋も例に漏れず、売り上げだけでは生活ができないほど。だけど

大好きな店を続けるためにはお金が必要。そこで考えたのが賭け事だった

幸いにも澄人にはサイドエフェクトがあり、どれが勝つのか知ることができた。と言つてもあまり稼ぎすぎするのも注目を浴びたり、八百長などの疑いも掛けられたりするので月に1度、必要な額だけ稼ぐことを決めていた

「まあそういうことだから、店や財布の心配はいらないよ」

「そ、それならいいが…」

「あんまりやり過ぎないように…」

問題にならない程度にはルールを決めてやっているのなら大丈夫だろうとレイジも林藤支部長も一応安心した。危ないことをやっているんじゃないかと思つたけれど、その心配は杞憂に終わった

「んおつつんぐ!!」

「遊真くん? もしかして」

「ハズレ、引いたのか…」

お菓子を空けて楽しく談笑をしていたグループでは奇声があがった。声の主は遊真で、口を尖らせて渋い表情をしていた

「運がなかったな、ゆーま」

「つうう…オレには運がなかったか」

三雲の手にはプラスチックの容器の中に3つの窪みがあった。近くにあった袋にはガムのお菓子だというのが分かる。それを見て澄人はアレかとすぐに理解した。3つの丸いガムが入っているそれは、1つだけがすぐくすっばいガムだったのだ。遊真は見事にそれを引き当ててしまったのだ

「すっばいだろ？ くじ運はなかったみたいだな」

「つぐ……じゃあ清瀬先輩、オレと勝負する？」

すっばいさは引いていくだろうが、それでもまだ口に残っているようで表情は戻らなかった。遊真は未開封のガムを取って澄人と運試しをしようとするが小南のストツプが入った

「やめといたほうがいいよ。澄人さんに運試し系の勝負はゼー……ったいに勝てないから」

「ふむ……なんでだ？」

「サイドエフェクトよ！ くじとかそういうのじゃ百発百中のイカサマよ！」

「い、いかさまって……さすがに酷いな……」

小さいときに澄人に何度も敗北している小南は敵意剥き出しで言った。ズルだなと自覚はありつつも、さすがにいかさまと言われたのは初めてで少し心にダメージが入った

「……………やつと、一歩…かな」

澄人は呟くように言った

勝負できなくてちよつとだけ残念そうにする遊真。ビールを模した容器に入ってるラムネを食べる三雲。ヨーグルトっぽいお菓子を食べる雨取。「人参」と書かれたぽんぽん菓子をあげるレイジ。一口サイズの硬いプリンを食べる小南。チューブに入ってるゼリーを吸う陽太郎

みんなそれぞれ澄人が持つてきた駄菓子を食べて、笑って、渋い顔して楽しんでた。叶えたかった夢はまだだけど、一歩目くらいには前に進めたんじゃないかなと思えていた。目の前に広がる光景が、そう思わせるには十分だった

「なーに満足そうな顔してるのよ？ 早く食べないと無くなるわよ？」

「それは困るな…オレもそろそろ食べるかな」

みんな駄菓子は最近食べたことないからと次々と食べていた。小南が声を掛けなければきつと澄人はそのまま眺めていたかもしれない

手を伸ばして一つとって食べる。そういえばオレも食べなければ意味がなかったな、と今更になって澄人は気付く

それからは目を跨ぐまでゲームをしたり、身の回りの話をしたりなど楽しくも騒がしい時間を過ごした

エピローグ 感謝の涙の味

玉狛に戻ることにになった澄人は年末の大掃除に支部に来ていた

人数も増えたことで半日で終え、木崎が用意した年越しそばも食べ終えた。残り十分で新年を迎えようと言う所で、屋上で三門市を眺めていた

視線の先にはボーダー本部基地があった

後悔、無力、喪失などマイナス感情が入り混じった複雑な気持ちで眺めていた

「風引くぞ?」

「…林藤さん」

一人でいたところで林藤支部長がコートを着てきた

「飲むか?」

「……ビールはすこし苦手かな」

隣まで来てビール缶を差し出すも澄人は苦手だった。日本酒や果実酒などは平気なのだが、ビールは少し苦手意識がある

「そっかーそいつは残念だな」

「飲めないわけじゃないんだけどね…」

「……無理はしてないか？」

「うん。大丈夫。模擬戦も何度かしてるけど林藤さんが心配してるようなことは今のところないよ」

人を相手にして戦うことにトラウマを抱えてしまった澄人を林藤支部長は心配していた

ヒーローに憧れ、ヒーローになろうとボウダーに入った澄人は現実を知り、ショックを受けた。仲間である林藤支部長は近くで見えていたからこそ、抜けることに反対はしなかった

だからこそ、こうして戻ってきたとき本当は無理をしているんじゃないなど。支部長としてではなく、かつての仲間だった者として確かめるために声を掛けた

「そっか……なら、これ以上は聞かなくても十分かもな」

澄人はもう20歳の成人した大人だ。自分の言葉には責任を持たなくてはいけない歳なつてきているから、本人が大丈夫だというのならその言葉を信じて背中を押してやらなければな、と林藤支部長は口にしたタバコを離して肺の中の空気を吐いた

「清瀬は吸わないのか？」

「吸いませんよ。舞のためにも肺がんにはなりたくないから」

ポケットからタバコを差し出されるも、澄人は吸わないため断った。妹の高校入学や

卒業、学校行事とか成人式とか両親の代わりに見届けてあげなくてはと。その為には長生きをするために健康的な生活を送ることを心がけている

「遠まわしにオレにも言ってる…?」

「そう聞こえたなら禁煙したらどうなんです? 陽太郎くんのためにも肺がんで早死になんてしたくないでしょ?」

「ははは…手厳しい」

まだ5歳の息子の陽太郎君のためにも林藤支部長には長生きをしなくてはいけないと澄人は考えていた。親のいない生活というのは意外と、いや、結構寂しいものだ。澄人は反抗期やその終わり頃に親を亡くしたが、舞はまだその頃は小学生だった。まだまだ頑張っている所を見て欲しい頃だったのだ

だから澄人は陽太郎くんにそんな悲しい思いをさせてたくはないと、させないで欲しい考えを含めて林藤支部長に言った

「それにしてもいつの間に結婚してたんですか? 5年前まで独身だと思ってたんですけど?」

「ん? いや、オレは今でも独身だぞ」

「…え?! ……じゃあ……陽太郎君は…林藤さん……」

のだが、返ってきた言葉は親子関係を否定をしてきた

ならば陽太郎くんは？ と考えた次に浮かんだのは、遊んでできてしまった子、だった。仲間として信頼していたのに、遊び人だったのかと軽蔑の眼差しを向ける

「ちよ、誤解してないか？ つつーか忘れたのか？ 陽太郎はアリステラで助けた子だぞ？」

言葉の意味と軽蔑の視線を向けられて林藤支部長は動揺した。さすがにそんなことはしないぞ、と。すぐに誤解を解かなければと陽太郎の正体を明かした

「……え……そ、だっけ……？」

確かに5年と少し前にアリステラから救援要請があり、戦いの果てに王族の子を救出し国を脱出するという最悪の少し手前の結果になってしまった。その時に助けたころまでは澄人も覚えていた。だが、多くの仲間を、片想いの子を失ったことで茫然自失となり林藤支部長たちの会話をろくに聞いてもいなかったのだ

「おーいたぞー！」

「どうした陽太郎？！」

澄人にとつては新事実を知って驚いていたところに、話に出ていた陽太郎がやってきた

「レイジが『もうすぐだぞ』といっていたぞ」

「あーもうそんな時間か」

木崎から年越しのカウントダウンがもうすぐ始まるから呼びに行こうとしていた。

そこに陽太郎が行きたいと言ったので簡単な言葉を聞いて伝えてきたというわけだ

「陽太郎。こいつな、お前を助けるためにがんばってくれたボーダーの1人なんだぞ」

「ちよ、林藤さん!? まだ5歳なのに言っても意味がー」

「そうなのか!? すみとはおれとるかおねえちゃんのおんじんだったのか!」

腰を落として頭を撫でながら、林藤支部長は澄人がアリステラに助けに来てくれた昔のボーダーの1人だつてことを教えた

5歳に言葉の意味をしつかりと理解できるわけがないと思ひ込んでいたのだが、陽太郎は確かに理解し、澄人のことを「恩人」と言った。しかも自分の出生やここにいる経緯までもすでに知っていたことに澄人が驚いた

「ありがとう」

「つつー」

感謝の言葉を口にした。5歳の子供が自分のことを理解し、そのためにどんなことがあつたのかも知っている。だからこそ、陽太郎の口から放たれた感謝は澄人の心を響いた

「すみとのおかけで、おれもるかおねえちゃんもげんきだぞ」

「つ……そつか、それは……よかつたよ……つ……つう」

沢山の犠牲を払い、深い傷を負ってまで得た結果の現在^{いま}。復帰できたといつても傷が完全に癒えた訳じゃない。心の傷の特効薬はどこにも存在しないし、正解は存在しない
あるとするならばそれは、涙を流すことができる純粋な言葉だけだろう

5歳の陽太郎は深い考えなんてまだできない。だからこそ、放たれる言葉は本心で純粋だ

堪えたい涙は止まらず、雷神丸に乗っている陽太郎を抱えて見えないようにした。だがそれは逆効果だった。まだ小さい手が澄人の頭を撫でたのだ

「ど、どこかいたいのか!? おれがわるいのか!? う、ご…ごめん」

いけないことを言っただけ泣かしてしまったと勘違いした陽太郎は謝った

「よう…：たろうぐ、んは…：わるく、ないよ…：」

何年被りに澄人は泣いた

仲間も失い、親も失って散々泣いて枯れたと思っていたはずの涙は、もうしばらくは止まらなかった

「あ、レイジさん。澄人さんたちは？」

「清瀬たちは…もうしばらく外にいる」

「えー？ なにそれ、風邪引いても知らないわよ」

影から会話を聞いていた木崎はそっとしておこうと静かに中へ戻っていった

小南はカウントダウンが始まるのに、と呼びに行こうとするが引き止める。いまもまだ泣いているであろう澄人の邪魔をするわけにはいかないと

「……はー……」

「スツキリしたか？」

「ああ……少し楽になったよ」

大人気なく、とまではいかないが泣いて満足した澄人は少しばかり、表情が晴れていた

「よし！ ならばレイジたちのところにもどるぞー！」

「そうだね……でも、そのまえに」

心も不思議と軽くなると少しばかり、羽目を外して騒ぎたい気分になった澄人は、林藤支部長が持ってきた缶ビールを開けて飲んだ

「苦手なんじゃないのか……？」

「つぶは……飲めないわけじゃないですよ……う……やっぱ匂いは慣れなさそう……」

ビール特有の苦味とのをぴりぴりと突く刺激は炭酸ジュースにはない。ビールだからこそその味なのだが、やはり匂いが苦手な澄人は一瞬で気分を落とされてしまった

「ぶははは。ビールの良さがまだ分からないようじゃ、まだまだ子供だな」
「っ…悪かったな。ビールも分からないお子様で！ どーせオレはヒーローが夢見がち
な子供だよ！」

平気な林藤支部長は少しからかい、それに乗った澄人は不貞腐れたように自分は子供
だと自虐した。残りのビールも煽りつつ屋内へ戻り新年を迎えた

閑話 ヒーローに憧れていた少年

7話 困っているときはヒーローが来てくれる味

—8年前 清瀬澄人12歳 中学1年生 春 4月—

「はい。怪しい人には付いていかず、まっすぐ家に帰りましょうね」

「起立。礼」

三門市にとある中学校。そこでは担任の挨拶が終わり、委員長の号令で生徒が立って頭を下げる。全員がさよならと挨拶をして部活に向かう者、そのまま家に帰ったりできたばかりの友達と遊ぶ話などしている

そのうちの一人、スクールバッグに戦隊ヒーローのラバーマスコットを付けている少年、清瀬^{きよせ}澄人^{すみと}は足早に教室を出た

「おい清瀬ー！ みんなで雄太ん家^ち行ってマックス^マスブラザーズ^ラやるけど来ねー？」

「ごめん！ 今日は早く帰りたいんだ!! また今度！」

廊下ですれ違ったまだ親しくない友達にゲームを誘われたが、澄人は即座に断って下駄箱へ走っていく。先生に走らないと怒られるが聞こえないフリをした

澄人がここまで急ぐ理由は大好きな父親が帰ってくるからだ

澄人の父、清瀬^{わたる}亘は今話題の若手イケメン俳優で、デビュー作となった特撮ヒーロー『激走戦隊 スピードセイバー』はキャストの顔面偏差率の高さから女性の視聴者も増えて高い視聴率となった

今日、その父親が仕事から帰ってきてお土産をくれるのだ。とは言ってもありきたりな特産品やお菓子ではない。澄人が期待しているのはご当地ヒーローのグッズだった。仕事の合間とかに勝ったりサインや写真とか取ってくれたりする。それが一番の楽しみだった

学校を出て急いで家へ向かっていると躓いて転んでしまった

「うわあ!?!…いつてえ」

春であったのが幸いだった。厚手の学ランにストラックスの格好だったため目立った怪我はしないで済んだ。手に少しの擦り傷はできたが、ヒーローが好きな澄人には「ヒーローだったらこんな怪我したことにはならない!」って思っているため気にすることではなかった

けど他にきにすることはあつた

「あれ…鞆?…ああ、落ちてるし!? もー今日は父さんが帰ってくるのにー」

立ち上がっても鞆がないことに気づき、辺りを見回すと土手の下に滑り落ちていた。急いで帰っている澄人は文句を言いながら橋の近くにある階段まで行って降りる。回

取してまた登ろうとしたとき目が合ってしまった

「え……何あれ？」

白い人の形をしたナニか。何かのマスケットやゆるキャラのようなもの。だけどそんな可愛いものではないような不気味さもあつた。それが頭部だ。白い大きな黄色い目が口の中にある。澄人をジツと見つめていた

「……あ、もしかして新シリーズの怪人かな！」

怖さもあるが、好奇心もあつた澄人は一歩ずつ近づいて答えを出した

新しく始まる戦隊シリーズの怪人なのだろうと。そうだと決まると恐怖を感じるのは当然だった。人間やヒーローたちを苦しめるためなのだから不気味さがなければいけないのだから

好奇心が圧倒的に膨れ上がった澄人は足早に近づいた

「うわーすげー…真っ白だけど…雑魚怪人なのか？ でもこれだけ大きいとヒーローも戦いづらそうだなー」

近づけば近づくほどソレは異様なほどの巨大さだった。まだ中学1年で156cmもある澄人の2倍近くある。体の幅も両手を広げてやつと横に届くくらい。これだけ大きければヒーローも苦戦をしそうだと、でも仲間たちと力を合わせて倒すのを想像したらそれもいいのかもしれないと、勝手に期待を膨らませていった

「あ、動いた！……え……？」

白いソレは腕を動かして澄人掴もうとしてきた。なんかヤバイかもしれないと危機感を感じ、手から逃れる

「こわ……ちよ！？」　ちよー！？　マジ、え？　ちよ、マジなの！？　だ、だれかー！」

5 mほど距離をとったのに一瞬で近づき、今度は逃がさないように捕まえた。抵抗しようにも掴んだ手は機械かと思うほど微塵も動くこともなく、身を振っても空いている手で止められてしまう。ここでやつと澄人は気づいた。これは戦隊の怪人でもなんでもないので。じゃあ何なんだ？　と考えるがわかるわけもなかった。今あるのは恐怖心と死にたくないという考えだけだったから

「え、なにアレ！？　やだ、やだー！！」

ナニかは顔を上に向けて黒い球体を出現させた。何もないとところに突然現れたことや、機械みたいな怪力とか理解の範疇を超えていて、ただ喚くだけしか何もできなかつた

澄人掴んだまま屈んだ。直感でどこかに誘拐されると理解した澄人は「オレの人生終わった……」と泣いた。白いナニかが飛ぼうとした瞬間、体が揺れた

異常を感じ後ろを振り向く。背中には幅の広いナイフが刺さっていて、1本のワイヤーが柄尻から伸びていて1人の男の持つ同じナイフと繋がっていた

「もう大丈夫だと少年！ 今助けるからな！」

「つつ!! だ、たすげでえー!!:!!」

もうだめだと思つたとき助けてきれくれる人がいた。澄人は必死で助けてと泣き叫んだ

男はワイヤーを引つ張りナイフを回収すると接近していく。白いのは折角捕まえた優秀な人間を伸ばさないために距離を取ろうとするが離れた。けれどそれが男の狙いだった

「子供を切るなよ！」

「分かつてます、空閑さん……つつ!!」

オールバックの青年が両手に持った刀で待ち構えていた。仕方なく片手を外し攻撃するために振りかぶるが、それより早く青年の刀が腕をぶった切った

伏兵がいたことと片腕を失ったことで状況が悪くなり、撤退を考えるが遠くから飛来する弾丸によって頭部を狙撃されしまった

「わ、わっあああ!!?」

力をなくしたソレは倒れ、掴む力が弱まったものの急な反応はできない澄人は一緒に倒れてしまった

「大丈夫か？ 怪我は？」

「え……えつと……はい、大丈夫……夫、です」

青年が駆け寄り澄人を立ち上がらせる。目立った怪我はしてないが、擦り傷が所々できていた。骨折や打撲などはない

「あの……おじさんたちは……?」

「おじつ!!?……コホン、お兄さんたちは……ポーターだよ」

「ぼ……だー?」

白い敵みたいなのを倒した青年たちのことが気になった澄人は問いかけた。おじさんと言われて軽くシヨックを受けた青年は『お兄さん』を強調して、少しの間があったがこちらの世界を守る組織『ポーター』であると言った

「境界防衛機関 ポーター」それが澄人を助けた人たちが所属する組織名

澄人が住んでいる世界の他にも無数の世界国家が存在し、時折こちらの世界に来ては人を攫っていくという。ポーターはそれを未然に防ぐためにある

運悪く澄人はそれに巻き込まれた、というよりも自ら巻き込まれに行つたようなものだ

「親に言われなかったのか? 知らないものや怪しいものに近づかないようにして」

「うう……ごめんなさい」

擦り傷でも軽く手当てはしておく必要があるため、ボーダーの基地である川沿いの建物に来ていた

そこで助けてくれた青年・忍田^{しのだ}真史^{まさかみ}に説教をされていた。若干おじさん呼ばわりしたことも根に持って

「まあまあ忍田くん。無事だったんだからそこまで怒ることはないだろう？ それに確かに今回ののは怪人っぽくも見えたからね」

「城戸さん……中学生だからって甘く考えていたらまた同じ目に遭いますよ？」

あとから声を掛けたのは城戸^{きよこ}政宗^{まさむね}。ボーダー内の年長者だ

「そうっすよー。おじさんって呼ばれたからってガミガミ言ったらほんとにおじさんになりますよー？」

「っつ……平良っ……オレはまだ25だ！ おじさんじゃねえ！」

のんびりとした口調で言ってきたのは平良^{たいら}響^{びびき}。忍田と同じ刀型の武器『弧月』と使う

高校3年生

「あの……おじ」

「……………」

ボーダーという説明は聞いたけれど、澄人の中にはある感情が燦っていた。ボーダーというのはヒーローなのかどうかを。それが聞きたくて口を開いたが、『おじさん』と言

いかけたところで忍田鋭い視線を受けて『お兄さん』と訂正した
 「お、お兄さんたちは…ヒーローなんですか？」

澄人がヒーローが好きで、怪人だと思つて近づいたということを手当てを受けている間に言った。だからその質問に全員が「そう見えるよな」と思った

「清瀬くん。ボーダーはヒーローとは少し違うかな。人助けをしたつてことに關しては近いものがあるけど、ボーダーは基本的に近界民ネイバーとの橋渡し役が目的なんだ」

「ねい、ばー……？」

新たな言葉が出て再び頭の上に「？」が浮かび上がる

「近界民ネイバーとはこの世界以外に住んでいる人たちのことを言うんだ」

「とは言つても僕たちと同じふつーの人間なんだけどね」

澄人たちが住んでいる世界が『玄界ミデン』と呼ばれる国の名前。それ以外にも様々な国家があり、そこに住む人々たちのことを纏めて『近界民ネイバー』と呼称している

ボーダーは他国との橋渡し、つまりは仲介役をするための組織ということになる。だけれど物事はそう簡単にはいかない

近界ネイバーの世界は国家間で戦争が頻発している。玄界ミデンはまだ目立った攻撃はないが、今回みたいに人攫いをするのがたまにある。運がよければ助けられるが、間に合わなかった場合連れ去られた国によつて扱いが変わってくる

「つつーわけでオレたちボーダーはできれば仲良くしよう、というわけだ」

「…でも、いつかは…戦争になるんですか…?」

「…かもしれない。できればそうならないように努力はしているがな」

仲良くできるならそれが一番だと澄人も納得した。小学生のときの修学旅行で広島に行つたときだ。原爆による実際の被害映像、写真、当時を生きていた人の話などを聞かされたことを思い出た。このときは面倒くさいと適当にしていたが、さつき実際に身の危険を感じた以上、戦争中だったときの事を思い返せば平和が一番だと思つた

今日みたいに危ないものには近づかない事を約束して家に帰つた

「お、やつと帰つたか、澄人」

「っ、父さん。おかえり」

家に帰れば父親が出迎えてくれたけれど、橋での出来事が大きすぎてすぐには喜びの感情が出てこなかった

「まあいいか。ほれ、今回のお土産はキーホルダーだ」

「…：うん、ありがとう」

「え…：澄人…?」

いつもの様子とは違う息子に父親は困惑した。お土産は受け取ってくれたが喜ぶ様子などなかった。体調でも悪いのだろうか? と心配するが母親が「もう中学生なんだ

しヒーローとか興味なくなってきたんじゃない？」と言った

そのことに本当にそうなのだろうか？と悩むが、自身の子供のころを思い返せば中学生はいわば大人に一步近づいた気持ちになるから、いつまでもヒーローが好きのままでは恥ずかしいと離れていった。だから澄人ももうそんな年頃なんだなど、嬉しくもあり悲しくもあつた

「……………ボーダー…かつこよかつたなあ」

部屋に戻つた澄人はベッドに横になつた今日の事を思い出していた。トリオン兵と呼ばれる白い怪物は玄界こちちの人たちを攫つていく。それを助けてくれたボーダーの人は、澄人の目にはテレビの中にしかないヒーローのように見えたのだ

ヒーローが好きで、ヒーローに憧れている澄人は胸のうちの衝動が大きくなっていくのが分かつた。自分もボーダーに入りたいと。入つてヒーローのように人を助けたり守つたりしたいと

空想の出来事じゃない、本当のヒーローになれる

そこまで考えてしまつた澄人はもう誰にも抑えることはできなかつた。翌日、放課後になると真つ先にボーダーの基地へ走つた

数日は勉強ばかりだつた。近界民ネイバーのこと、トリガーのこと、トリオン兵のこと。そし

て、ボーダーの目的と目指す未来を

そして、やっと初めてトリガーを使う事を許可された

「やってごらん」

「っ!!…と、トリガーオン…!」

訓練室の真ん中で見られながらトリガーを握る。参観日の発表会のような恥ずかしさと緊張を感じながらトリガーを起動した

「つつ…これで、トリオン体になったの?」

初めて換装した澄人は本当にできたのか少し不安になった。感覚もや体格も変わっていない。唯一服だけはみんなと同じものになったが、それ以外の変化は分からなかったのだ

「そうだよ。中に入ってトリガーを使ってみようか」

忍田が2番と書かれた扉を開ける。後を付いて行って中に入るとただの白い大きなタイルのようなものに囲われた部屋だった

「それじゃまずはこれを弧月で切ってみようか」

「こ、弧月…:わ、出た!!」

出てきたのは訓練用的。ボーリングのピンのような形をしている

忍田はいきなりトリオン兵を相手にさせず、まずは訓練用的でトリガーの扱いを覚

えさせようと考えていた

「清瀬くん、言わなくても頭で使いたいトリガーを指定すれば出てくるよ」

「え……っ……は、はやく言つてよ……」

苦笑いをして起動の仕方を教えると、わざわざ口にしていったことが恥ずかしくなつて澄人は俯いてしまった。ちよつとしたことでも恥ずかしいことは大げさに捉えてしまふのは中学生らしい反応だった

部屋の外でモニター越しに見ていたメンバーは微笑ましく見ていた

何はともあれこうして澄人はボーダーのメンバーとして仲間入りをし、今日から部活には入らずに訓練を積み重ねていった

1カ月後

『清瀬くん！ 急いで！』

「はいっ！」

訓練をしていたら近くでトリオン反応が出現したため、澄人と城戸は中断して向かっていた。南西に1kmほどと少し遠い。まだ明るいため人が出歩いたりするから屋根の上を飛んで急行なんてできるわけもなかった

ボーダーはまだ秘密組織のため公になるようなことは極力しないようにしている。そのため地上でスピードを落としながら走っているのだ。車だとスピード違反になっ

てしまうため使えない。むしろトリオン体なら肉体的疲労もないし、設定で温度も感じないようにすることもできる

「見えた！ 城戸さん！」

『民間人には傷を付けないようにするんだ！』

「はい！」

ボーダーに入つての初めての人助け。緊張を感じながら腰に下げた弧月を抜いた

「その人を、離せええ！」

「！」

「きやああ!？」

大きく振りかぶりながら接近する。振り下ろされた弧月はトリオン兵の腕を切り落とし、掴まれていた人を救出した

トリオン兵は距離を取るが、反対に城戸が回りこんでいたため逃げ場をなくした

何度も訓練で倒したことのある相手だから動きが分かっている澄人は、城戸の攻撃を回避した先に先回りしオプシヨントリガーの旋空を起動して胴体を切断した

完全に動かなくなった事を確認したら助けた人のところへ向かう

「大丈夫？ 怪我はない？」

「え、あ……う、うん……大丈夫よ、ありがとう……えっと、君たちは……？」

「つ：お、オレたち、じゃない：オレはきちよ：つ、清瀬澄人つ：ボーダーだ！」
 助けられたのは市内の高校に通う女子高生。意味の分からないことの連続で乱れた髪や落ちてしまったりボンなど気にする余裕もなかった

尋ねられた澄人は緊張しながらボーダーと名乗った

始めて人を助けて、ヒーローのように名乗ることに憧れていた。なのに噛んでしまった。数秒後には顔を手で隠して「穴に埋まりたい」とぼやいていた

「ありがとうね、助けてくれて。私は行方楓よ」

恥ずかしさに悶える澄人を見て恐怖が薄れたのかかわいい子だなと感想を思いつつ、女子高生は行方楓なめかたと名乗り、数日後にボーダーに入ることとなった

8年前の清瀬澄人

ポジション：アタッカー

トリオン：5

攻撃：4

防御：3

機動：2

技術 : 2

射程 : 2

指揮 : 2

特殊戦術 : 1

TOTAL : 21

メイン

・ 弧月・旋空・フリー・シールド

サブ

・ フリー・フリー・バツグワーム・シールド

サイドエフェクト : なし

8話 破棄トリガーは可能性の味

ボーダーに澄人が加入して半年。メンバーも少し増えてきたり減ったりした

まずは空閑有吾。やることがあるからと近^{ネイバーフッド}界の旅へ出て行った。どうやらまだ幼い息子がいるらしく、一時的に玄界^{ミデン}に戻ってきたのだという。有吾は玄界^{ミデン}以外の国を見て回り情報を得て、ボーダーや同盟国のために役立てようと考えていた

みんなも未知の国の情報は少しでもほしいとも思っていたし、三門市を守るための戦力も欠かせないからと見送った

それから少しして、風間^{かざま}進^{しん}という高校1年の少年が入った。澄人たちがトリオン兵と戦っているのを見て正義感から力になろうとやってきた。将来は警察官になりたいというが彼の夢だ

同じ学校の先輩脇坂^{わきさか}イブキ。高校2年生でいつも眠そうにしている。でもやるときはしっかりとやれる少しだけ不安な少年

抜けた空閑も含めれば10名が今のボーダーの人数

「清瀬くん、今日も手合わせするか？」

「えー忍田さん強すぎるもん！」

いつものように澄人は放課後にはボーダーの基地に行き、訓練を行うのが日課のようになっていた。というよりも、他の子が部活に入っている時間が訓練になっている。澄人の中では部活のような感覚だった

弧月の練習をしていたら忍田が部屋に入っていて、模擬戦をしようと言って来るが。数段上の忍田相手に澄人は一度も勝てたことが無い。ダメージを与えることができても致命傷には届かないことが多かった

「入ってきたばかりの清瀬くんが相手になったらそれはすごいけど、模擬戦なら実力が近い相手とするのが一番だと思うが。どうかな忍田くん？」

助太刀をするように新たに入ってきたのは最上宗一^{もがみ そういち}。ボーダーの大人組みの1人で弧月使い

「最上さん…確かにそうですね……！」

「ふう……助かった」

標的が移ったことに安心した澄人は、また狙われないうちに訓練室から逃げた。忍田は普段は落ち着いた大人ではあるが、戦いや訓練になると熱くなる節がある。そのため一度戦うとまず5戦は逃げれない。落ち着いたところに逃げなければさらに5戦。また5戦と戦いを一方的に挑まれて精神的疲労が溜まっていく

「災難だったな澄人」

「林藤さん……いたなら助けてよー」

「ハハハ、悪いな。最上さんが行くって言うから」

面白いことがあれば眺めたい林藤は確かに最上が助けに行くと言ったから残っていた。けれどそれよりも前に忍田が部屋に入るのを止めなかった。結局はただ見ているだけのつもりだったのだ

「ちえー……城戸さん、それ何？」

「え、これか？ 破棄トリガーだ」

「破棄トリガー……？」

部屋の壁にはトリガーを保管しておくための棚が設置されている。本来は1つ1つ丁寧に保管してのだが、下の棚には乱雑に積み重ねているだけのトリガーがあった。城戸はこれを破棄トリガーと言った

破棄トリガーとは同盟国が開発した試作品もしくは古くなり使われなくなったトリガーたちのこと。ボーターはまだトリガーの独自開発は易々と行えない。設備が乏しいのもそうだが、開発には資金と物資も必要になる。表立って動いていないボーターが大量に購入したりするのは怪しまれる可能性があるため、こうして同盟国からトリガーをもらっているのだ。それで開発されたのが弧月やイーグレットなどといったトリ

ガーだ

「へー……どんなのがあるの?」

「どんなの?…そうだな……これはブーメランだな。投げると込めたトリオンによって飛距離や切断力が上がる。ただし撃ち落されやすいからお蔵入りになったわけだ」

「へー……これは?」

「こっちは…ハンマーだね。振り回して投げれば命中した瞬間爆発する。ただし寄られると弱いから使われることも無くお蔵入りになった」

「どんなのがあるのかと興味津々で聞いていた澄人だけど、デメリットが大きすぎるのを知ると「なんでそんなの作ったんだ?」と疑問しか出てこなかった

「こっちは手斧だね。威力は弧月と同等だけどリーチが短いから超近距離じゃないと戦えないね」

「……どれも使えないものばかりじゃん」

「つハハハ。そりやおまえ、一発で強いトリガーなんてできるわけ無いだろ? 試行錯誤してやっと使えるトリガーになるんだから」

林藤の言っていることはもつともだった。ボーダーがメインで使っている近接武器の「弧月」も、アリステラから貰った長剣のトリガー解析し、自分たちに使いやすいように重さ、長さ、鋭さを調整してやっと、日本刀の形をベースにした近接トリガーを開

発できた

偶然、一発でできる可能性もあるだろうが。おそらく使い手は限られるだろう

「林藤くんの言うとおりだよ。別にこれはゴミでもない。今後ボーダーのトリガーを作るのに役立つってくれる宝だよ」

今後のボーダー考えた城戸はきつとトリガーはもつと必要になる。そのためには研究材料となるものは少しでも多いほうがいい。開発する人たちが0から考える必要が無くなる分、開発期間を短縮できるのだから

「ふーん…最後のこれは？」

「これか？ これは両手剣だな」

「え、それって上と下に剣が付いているやつだよな!？」

「そ、そうだけど…よく知っているね？」

1つ1つ説明していたトリガーも残り1つとなった。城戸は記憶の中から残ってる破棄トリガーを思い出し口に出すと、突然澄人が興奮しだした

両手剣と聞いた澄人は携帯を取り出して画像を表示して見せた。それは「激走戦隊スピードセイバー」のセイバーグリーンで、彼の専用の武器のスピードブレードを持っている

「オレの好きなスピードセイバーのセイバーグリーンが使っている武器が両手剣なんだ

!! 弧月なのは仕方ないなーって思っていたんだけど、両手剣があるならオレが使いたい!!」

「っ……でも、破棄トリガーだから、清瀬くんには無理だよ」

「……あ………そっか………」

活き活きとした表情で両手剣のトリガーを使いたいと言った澄人。その熱量に少し気圧された城戸と呆れた林藤は少し固まっていた。けれど破棄トリガーであることを言われて思い出した澄人は急速に表情が曇り肩を落とした

少年の純粹な心を曇らせたことに罪悪感に捉われる大人二人。何とかしてあげたいと言いたいが、現状それを解決する方法は分からなかった

「忍田くんまた強くなったね? もう私を勝ち越せるんじゃないか?」

「冗談言わないでくださいよ。最上さんには適いませ………どうしたの澄人くん?」

戦って満足したのか晴々とした表情の忍田と仲間の成長に喜ぶ最上が訓練室から出てきた。だがすぐに落ち込んだ澄人と困惑する大人たちを見て戸惑った

とりあえず訓練は終わりだから上にみんなで上がった

リビングにいた者たちも澄人の様子を見て事情を聞くと全員納得した

まだ純粹な中学1年なら憧れのヒーローに近づけるなら確かになりたいと思うのは

当然だろう。だけど思いが強すぎると日常生活にまで影響を及ぼしてしまう。所謂『中二病』という病に

「かわいいなー澄人くんは。うちの弟なんか『オレはもう中学生だし、元々興味は無い』って鬱陶しがられるんだよ」

子供心を残す澄人を風間はかなり気に入っていた。中学生にして早過ぎるくらいに大人しい弟を持つているため、自分に正直な澄人を可愛がっていた。林藤は思春期なんだし反抗期になつてきているじゃないか？ と思うが目の前に同学年のヒーローが好きな子がいるので一概にそうとは言えなかった

「それじゃあさー 作っちゃおうよ！ 澄人くんでも使える両手剣のトリガーー」

話を聞いていた行方は簡単に作ろうというが、トリガー開発するのにもそんな簡単な話ではない。城戸たちは難色を示すだろうと最近入った者以外は思っていたのだが

「そうだな……そろそろ弧月以外の近接トリガーもあつてもいいだろう」

「っ……!!」

城戸は腕を組んで少し考えた後作る事を許可した。ボウダーのトリガーも中距離以上はシューター、ガンナーと合わせて3種類のトリガーがある。けれど近距離のトリガーは弧月一つの為、今後増える仲間のためにも種類は増やしておくほうがいいだろうと考えた

「城戸さん、そんな事言ってもいいのかい？ 一人すっごいキラキラした目で見てくる子がいるよ？」

「みんなで頑張れば大丈夫だよ。清瀬くん、君が一番求めているんだから完成まで頑張ってもらうよ？」

「うん!! オレ最後までやるよ!」

念願の両手剣が使える。そのことが叶うことに澄人は一気に表情を明るくした

こうして後に完成系となる攻防一体の両手剣トリガー『レイガスト』の開発が始まった

最初の1週間はどのような形に完成させるか話し合った。ベースとなる両手剣はかなりの重量がある実体剣だった。これを使いやすいようにするにはまずは重量を減らすことになった。それでも弧月以上はあるから移動も考慮した形状の変化が必要だった

「うーん……画像みたいに大きくしたり小さくしたりは？」

「いいかもしれないが、サイズを変えるたびに重さも変わるから余計に扱いが難しくなるぞ?」

画像を拡大縮小の要領でできないかと考えた。けどサイズが変わるということは重

量も変わるため却下だった

「必要なきに出したりしまったり！」

「トリオンは無限じゃないから出し入れを繰り返すとすぐにトリオン切れになるぞ？」

トリガーはセットした時点で必要な分を消費している。それで残った分で戦うのだが、当然出し入れを繰り返せば減ってしまうのでこれも却下だった

「とりあえず難しいことは考えずに弧月をくつつけた感じにしてみよう」

林藤はいきなり完成に近い状態で作るのは難しいと考えて、まずは試作品として弧月の柄尻同士を繋ぎ合わせた状態にした

そこから刃を短く、幅を広くして破棄トリガーと近い形にしていた

「どうだ？」

「つぶ……つは………使いやすいけれど……なんか……」

データ上で作った試作品を訓練室で再現したトリガーを持って振り回す澄人。弧月2本分の重さだから軽いとは言えないがそれなりに納得はできる性能だった。けれど澄人には胸のうちで「これじゃない感」が渦巻いていた

憧れていた両手剣を手にして嬉しくはあったし、試作品とはいえ最初にしては納得できるほどの性能を持っていたのにだ

なんとかして「これじゃない感」を言葉にしようと悩むが出てこない。林藤はそうす

ぐに完成するわけじゃないからと言って今日はこれで終わることとした

「お兄ちゃんおかえりー!! 見てみて! テストで100点取ったの!!」

「え、すげーじゃん!」

どうすれば解決するか考えながら帰宅すると澄人の妹の舞が小学校のテスト用紙を広げて見せてきた。解答欄はすべて埋まっっていて、全部に赤丸が付いていた。名前の横には花丸と数字の100が書かれていた

舞は満点を取ったのだ。妹のまさかの偉業に驚きと嬉しさを感じ、優等生だなど頭を撫でながら褒めた

「澄人ーあんたは何点だったの?」

「……………え? ナニガ?」

「試験。中間試験があったんでしょ?」

キッチンでご飯の準備をしていた母親の言葉に歓喜の気持ちは一瞬で吹き飛んでしまい、急に寒気を感じていた

夏休みを終えて数ヶ月後には2学期の中間試験がある。学校の行事予定は配られているため、バレないだろうと思っただけでも遅いのだ。父親が俳優という職業柄スケジュールの把握は習慣づいていたため忘れてはいなかった

「澄人? テスト用紙は?」

「……………」

後ろを向いて顔を合わせないようにしていたが意味は無かった

接近してきた母親の手によって鞆を奪われ、中身を漁られた挙句見つかってしまったのだ。「20点」のテスト用紙が

そして当然、テスト勉強していなかった澄人は怒られた

試作中のトリガーを使ってモールモッドを倒していくが、ブレードが両端に延びたため扱いに戸惑っていた。憧れがあったとは言ってもそれは好きであって得意ではない

「あ、しまっ…!!」

持ち手で回転させていたら自分の足を切ってしまった。気が逸れて隙ができた瞬間トリオン供給器官を貫かれて訓練は終わった

「ちよつと使えるくらいで戦えるわけないだろ？ 弧月のままでよかつたんじゃないのか？」

「う……………でも」

部屋から出れば千尋がもつともな事を言ってきた。訓練相手のいない時間では問題なく使えていた。けれどトリオン兵を相手に訓練をすると、さつきみたいに自分の体を切ってしまう。ブレードがトリオン兵に引つかかかってしまうなどのミスが出てくる。

弧月より大きいから大振りになって隙が大きい

訓練成績も弧月の時より落ちていた。それでも澄人は好きなヒーローの武器を使えるってことに子供心が刺激されて、トリガーを戻す事を迷ってしまった

「焦らず作っていい？ まだ試作品なんだし、改良していけばいいんだから！」

「行方さん……うん、そうだよね！」

千尋は狙撃の訓練を行うため中に入っていた

落ち込む澄人に学校帰りの行方が近づいて励ました。彼女の言うとおりでまだ試作品の段階。問題点があればその都度改良をしていき、完成形に近づけていけばいいのだ

さらに1ヶ月が経ち試作品に変化があった

トリガー大きい分防御が難しいため被弾が増えてしまう。それを見た千尋が「じゃあ、攻撃と防御を一緒にしてしまえばいいだろ？」と一言。最初はみんな理解はできなかったが、城戸がブレードとシールドをひとつにすればいいのでは？ と思いついたのだ

そうして試作品2号ができた

ブレードは少し厚みを増しただけが、空いていた持ち手のところにハンドガードが追加された。シールドを常時展開しているようなもの。当然トリオン消費は増えたが、訓練での被弾回数は3割ほど減った。自分だけの戦えるトリガーになってきているこ

とに澄人は嬉しくなっていたいき

「千尋さんありがとう！」

と、お礼を言った

「つ……べつに、攻撃手のお前たちがやられたらオレが戦いにくくなるだけだ」

普段意地悪なことを言ってしまったりする千尋は、澄人の純粹な眼差しと感謝の言葉に照れてしまった。それを悟られないように誤魔化すが、後ろで見ていた大人組みは若い子達の青春に微笑ましく見ていた

気温も下がり少し重ね着しなければ肌寒くなってくるころ、曇り空の下を澄人たち中学生はまとまって帰っていた

「なあ！ 今日春樹んちで遊ばね？」

「いいよ！ 今日絶対負けねーから！」

毎日訓練ばかりというわけにもいかず、澄人は週に何日かは学校でできた友達と遊んでいた。城戸や桐嶋の言葉もあり素直に従っていた

住宅地に入るために道を曲がるころ、対面からランドセルを背負った小学生がいた。つまらなそうな、楽しみがないような寂しい表情をしている。澄人たちが横を通るとき、小学生は目を見開いた

「あ……とりおん？……ボーダー、近界民……」

突然。自分の中にくつつもの光景と知識が流れ込んできた。世界が変わるほどの大きな違いから、次に踏み出す足がどちらかの小さな違いまで。それこそ無限の可能性に近い情報を彼は知った

そして、自分がこれから何をすればいいのかも

「これが……僕のやらなくちゃいけないこと？」

小学生の彼・迅悠一は未来が見える超能力で自分のすべきことを知った。力を得た意味がこのためなんだと理解し、行動に移した

9話 未来への加速

迅悠^{じんゆういち}一。小学5年生。三門市内の小学校に通う変わった子供

その理由は未来が見えるということ。発動条件も不明、見える未来は必ず実現するわけでもない。だが、彼はその力が芽生えたことで授業で先生の質問にもなんなく正解を答え、テストには満点の解答を書いた。特に国語の言葉の意味、登場人物の行動理由などを一言一句間違えなかったことに教師はカンニングを疑った

クラスメイトたちも突然の優等生ぶりに異質さを感じ、虐めを行おうとするものもいた

友達も減り、学校生活がつまらなくなってきたときだった。中学生の集団がゲームの話をしながらあるていた

「なあー！ 今日春樹んちで遊ばね？」

「いいよー！ 今日絶対負けねーからー！」

友達の家で遊ぶ話をしていて、今度は負けないと強気の言葉を言う中学生に迅は残念、と頭の中で言葉を吐いた。負けないうった彼はいつものように負けて拗ねてしま

う光景が見えたのだ

未来が分かるなんて最高。最強の超能力。アニメや漫画では強い力の代表とされるが、実際それを芽生えさせた迅は嫌な能力だと実感していた。おかげで学校では一人ぼっち、カンニングしたんだろ？ と先生に疑われる

なんでこんな力が僕にあるんだ？ と嫌気がさしていたとき、いつも見る未来の光景より刺激的なものを見た

白い巨大な体躯。光る剣。異世界。まるで漫画のような光景に迅は驚いていた。しかもそれに自分も関わっているということにも

「迅悠一です。よろしくおねがいます」

そして、翌日の放課後。ボーダーの基地に仲間になるために来ていた

「未来が見える…城戸さん。もしかしてこれって…」

「ああ、おそらくサイドエフエクトだろうな」

「サイドエフエクト？」

迅は自分が未来が見えることを話した。不安はあったが、多くの未来でボーダー隊員になっていたから来た。ボーダーの人たちは超能力の正体を知っていることを知っていたから伝えた

半年以上経つ澄人も知らない言葉に疑問しか浮かばなかった

「そういえばまだ話していなかったね。サイドエフェクトというのはトリオン能力が優秀な人に稀に発言する力のこと。多くは感覚器官の延長みたいなものだが、彼のように優れたサイドエフェクトを持つ者もいる」

城戸の説明にいまち理解はできていない澄人はとにかくトリオンで超能力が芽生えたんだということだけは分かった。あとで忍田が分かりやすく噛み砕いて説明をしてちゃんと理解をした

いつか自分にもサイドエフェクトが芽生えないかなと期待を胸に今日も訓練に励んだ

12月。冬になり寒さも本格的になり気温が一桁になる日も多くなってきた。ボーダーは変わらず訓練、近界民撃退ネイバーを繰り返す。そんなある日、とある事件というよりは、事故が起こった

「っ！ 澄人くん危ない!! 旋空っ!!」

「え……っ!?」

河川敷で訓練をしていた忍田が白い大きな物体に気づいた。2つの間には学校からやってきた澄人がいて、咄嗟に忍田は旋空を放った

危ないと言われて何のことか分からない澄人は、忍田の突然の行動に理解ができなかった。けどすぐに後ろで大きな音がして振り返って理解はした。だが戸惑いしかな

かった

「危なかったね澄人くん。後ろにトリオン兵がいたよ」

「……えっと……忍田さん……」

「ん？ なんだ？」

「どうするの、コレ？」

「コレ？……ツツハ!!？」

仲間を助けたことに安堵する忍田に対して澄人は冷や汗を掻いた。この真冬の中で汗を掻いてはすぐに冷えて風邪を引いてしまうだろう。けれどそんな事を気にしている余裕はなかった。「コレ」と言った澄人の言葉を確かめるように忍田も見ると、漸く自分のしたことを理解した

「なにになに!? すごい音がしたけど？」

「何があつたんだ忍田くん？」

「うわー……オレしーらね」

物音を聞きつけて基地から仲間たちが出てきた。ほとんどが忍田と澄人を見たけど、数人は音の発生源を見て引き攣ったり驚いていたりと表情を変えていた

「き、城戸さん……」

「あー……」

「つ……すいませんでしたー!!」

忍田が斬った物、それは城戸の少し高めの自家用車だった

「研ぎ澄まされた旋空はきれいな断面で一刀両断していた。不幸中の幸いなのはガソリンが発火しなくて爆発をしなかったことだろう。もし爆発していたら間違いない。澄人は怪我を負っていたし、周辺の住民や警察や消防まで来て大事になっていたに違いない。誤魔化すのもかなり苦労することだろう」

それから日が進みついに澄人が考えたトリガー「レイガスト」が完成した

「やったね澄人くん!」

「う、うん……!」

行方やレイジなどボーダーのみんなが完成を祝った

「試行錯誤して完成したレイガストは満足できる完成度で。ブレード部分もシールドが形状変更することでブレードモードと、広げて防御するシールドモードに短時間で切り替えられるようになった。そのため持ち手は最小限になった」

桐嶋が早速テストしてみようと行って訓練室に10体ほどのモールドモッドが再現された

「……ふうー……よしー!」

息を吐いて落ち着くと澄人が動き出す。同時に停止していたモールドモッドを戦闘

モードに切り替えた

振り下ろされるブレードを受け止めて弾き返し目を切り裂く。左右からブレードが迫ってくるのが分かると、シールドとシールドモードにしたレイガストで防いだ。するとただシールドはヒビが入り先端が少しだけ飛び出した、対してレイガストはヒビすら入っておらず何度も斬りつけてくるブレードに耐えていた

「おっと、あぶねっ!」

後ろからもモールモッドが来ていたから最初に倒したのを踏み台にして前に飛ぶと、回り込もうとしていたモールモッドへブレードモードにしたレイガストを叩き付けるように振り下ろした

「よっしゃ!!」

テストには上々の性能にモニターからみている仲間も完成形で十分だろうと思っていた。細身の弧月と違い大きくなったため取り回しが心配になっていたが、これまでの試作品で訓練していたこともあって大丈夫そうであった

シールドモードでの防御力も高く、前に出て盾役としても使えそうだと忍田たち大人はもう先のことを考えていた

「これで、ラストっ…あ」

ほとんど倒して最後の1体というところで澄人はレイガストの柄尻側のブレードを

太ももにぶつけてしまった。バランスが崩れて転倒し、その隙をモールモッドは容赦なくブレードで斬りつけた

あと少しだったというところだったが、それは熟練不足ということもあり今後に期待していた

12月は城戸の車両断事件から始まってレイガスト完成や新たな仲間の加入、クリスマスや大掃除など色々濃いうち1ヶ月になった

年が開けると澄人の一番最初の出来事は中学2年の春に父の入院の報せだった
「父さん……大丈夫なのか？」

俳優を職業しているため撮影の場所によっては遠方に行くこともある。今は山口県で撮影をしているらしく、近くの病院に入院をしている。母に連れられてお見舞いに行つた澄人は、ベッドに横になっている父を見て心配する気持ちが大きくなった

「もちろんだ！ 手術して取ればいつも通り元気な父さんに戻るよ」

手を伸ばして頭を撫でられる。いつものような力強さはないが、それでも明るい表情を見てやっとな安心した

5日後。手術は成功し2週間で退院し残りの撮影も行つた

「そっか、お父さん元気になったんだね」

「うん。ちよつと不安だったけどもう大丈夫……？」

三門市に戻っていた澄人は学校から出された宿題を片付けるために基地でやっていた。そこへ行方が訓練から戻ってきて手伝ってくれているわけだ

話が終わったとき澄人は口の中の異変に気づいた。さつきまでは味なんてしなかったのに、今は薄めた苦い味がしたのだ。よくわからないままコップの中のお茶を飲んで苦味を消し去った

「じゃあ、続きをやるうか」

「う…はい」

恐らくこの世界に宿題が好きな人はいないだろう。まだ半分も終えていないプリントを見て肩を落とした。行方が手伝ってくれるといっても結局は自分で解かないといけないと最後まで教えてはくれないのだ。そうじゃないと澄人のためにならないのだから

学校が終わり基地に行くと城戸たちが誰かと話していた。澄人は大事なことを話し合っているみたいな空気に入るのをやめて荷物を持ったまま訓練室に向かう

「近界民^{ネイバ}? え、人間だったよ!」

「それはそうだよ澄人くん。そうじゃないと僕たちと同盟を結ぶことなんてできないよ」

訓練相手に平良と模擬戦をしていると、リビングにいた人たちの話を話した。てつき澄人は近界民^{ネイバー}というのは今まで戦ってきたトリオン兵みたいなので、AIみたいなのと取引をして同盟を結んでいるのだとばかり思っていたのだ

「それじゃあレイガストの元になった破棄トリガーなんていらぬし、そもそもトリガーなんて必要ないじゃん」

「あ、そっか」

「隙あり」

「ちよ!?…もー…平良さんずりいって」

トリオン兵^{ネイバー}が近界民なら平良の言うとおりにトリガーなんてものは必要ない。自身の身体に武器が付いているのだから。そのことに気づいた澄人は体の動きが少しだけ鈍くなり、その隙を逃さなかつた平良は流れるような動作で足を切つてから首も切つた

「いやいや、訓練中なんだからさ…考えことした清瀬くんが悪いって」

不満を口にされた平良は困つた。訓練中とはいえ戦闘で考え事してしまうのはよくないことだ。それを指摘すれば今度はまだレイガストで戦うのに慣れていないんだよ、と言い返してくるが

「そのレイガストで戦えるようにするための訓練でしょ…?」

「つう…そーだけど…」

と、そもそも目的を言われればさすがに納得して黙るしかなかった

休憩をしようと言われてジュースを飲みの上にあがって行くと丁度客人と鉢合わせた

「おっと。ごめんね」

「い、いえ…」

初対面ということもあり近界民ネイバーに対して萎縮してしまった澄人。ぶつかるともなければこけるなんてこともなかった。顔を見ればただの普通の人だと、旅行に来た外国人って見た目だった

もしかしたら外見だけで中身は機械のサイボーグだって可能性もある。テレビや映画でそういうのを見たことがある澄人は考えてしまうが、突然頭に乗った手が違うと言ってきた

「いつか共に戦える日を待っているよ」

「あ……はい……?」

近界民ネイバーは見守るような目で澄人を見て言った。言葉の意味を簡単にしか受け取れなかった澄人は頷くように返事をするだけだった

下へ階段を降りていくのを見て思った。近界民ネイバーって実はいい人たちなんじゃないか? と。でも口の中が否定するように急に苦くなった

「うえ……虫歯……じゃないよな……?」

頭の中に不安が過ぎつた。どこも痛くはないけど口の中が急におかしくなるなんて虫歯以外思い当たらなかつた

「彼も、戦士なのかい?」

「ええ、もうすぐで1年なりますね」

ボーダー基地を出た近界民^{ネイバー}は後ろを歩く城戸たちに投げかけるように言った

廊下であつた澄人のことを見て胸を痛めたためだ

近界民^{ネイバー}同士の戦いは過酷だ。故にいずれはあの子も地獄を見ることになるのだろうと心配をした。いくら若い方がトリオン能力が鍛えられるからといって、子供が戦いに身を置くのは彼にとつては苦痛だった

「そうか……私にもあれくらいの子がいてね……戦士になりたいといつてるのを説得させるのには苦勞しましたよ」

「……だが、我々ボーダーにはまだ貴方達ほどの力はありません。子供を戦わせることに對する気持ちは分かりますが……」

妻も子供いる城戸は近界民^{ネイバー}の言っていることが痛いほどに分かつていた。けれど、公に活動していないボーダーはたとえ子供であつても力があるのなら貸してほしいのだ。近^{ネイバー}界からやつてくる脅威からこの世界を守るためにも

清瀬澄人 設定

※正しくは「バツグワーム」です
清瀬澄人^{きよせ すみと}

179cm

20歳

3月1日

B型

好きなもの：駄菓子 家族 ヒーロー戦隊

嫌いなもの：雨 約束

趣味：掃除 水泳

職業：駄菓子屋店主

星座：みつばち座

家族：祖母、妹

RELATION

祖母 (身体が心配な祖母)

妹 (愛する妹)

蒼也くん (同じ年だけど弟みたいな友達)

林藤さん (助けてくれたおっさん)

ポジション：アタッカー

トリオン：8

攻撃：6

防御：5

機動：4

技術：5

射程：4

指揮：2

特殊戦術：3

TOTAL：37

サイドエフェクト：味覚判別

物事を選ぶときや疑問の答えの当りとハズレが分かる。当りは甘く、ハズレは苦く感じる。

何かを食べて味を書き換えない限りは続く

トリガー

「雅臥祢」
まさがね

メイン

・雅臥祢まさがね ・乱舞 ・フリー ・エスコード

サブ

・閃剣 ・フリー ・バツグワーム ・シールド

「雅臥祢」
まさがね

ハンドガードのある実体のある両手剣。元は同盟国で使われていたトリガー。交渉で不要となったトリガーを受け取り、改良と訓練で澄人が使うこととなった

レイガストのベースにもなった。不採用理由は大き過ぎる。取り回しが悪い。トリオン消費がレイガストの1.3倍高い。重い。などである

表舞台に出るときのために誰でも使えるように調整したのがレイガストである

澄人が好んで使うのは適正があった、大きな武器に憧れていた、一番好きなヒーロー

が使っている武器に似ている、からである

「乱舞」

手を握らずに思うように操る。半径50mまでなら飛ばすこともできる

雅臥衿まさがねを自由に軽やかに扱うために澄人が考案したオプショントリガー。後にレイガストのオプショントリガー「スラストター」へ発展する

「閃剣」

トリオンでできた片刃の剣を生成。演舞でもするかのように自在に動かすことができる。普段は2本だが、限界は6本まで出せる。ただし空間認識がそれなりに必要なため、戦闘能力を維持するためにあまり増やさない。束にして槍のようにし貫通力を高める

耐久力はC級時代の三雲のレイガストレベル

「バッグワーム」

大型の雅臥衿まさがねを扱うのにマントのように長いままでは邪魔なため短くした。最終的にポンチョへたどり着いた。過去にはマフラーとか考えていたらしい

備考

幼少は俳優だった父親に憧れヒーローになることを夢に見ていた

中学2年の秋に父親はガンに。3年の春に母親は交通事故で亡くす。卒業と同時に

祖父が創った駄菓子屋で働く。商売セミナーなどに参加して勉強しながら、サイドエフエクトで間違った選択を可能な限り回避しつつ経営していく

免許も取得し親の車を使う

残った家族を大切にしている

中学生に上がって一月経つ頃にトリオン兵に遭遇し、襲われかけたところに当時のボーダーメンバーが駆けつける。特撮ヒーローみたいな光景に自分もなりたいたいとボーダーに入る

トリオン兵の撃退しながら学校と両立。一度だけ近界民^{ネイバー}へ行き戦ったが、本物の戦争を知り、仲間を失ったことで懂れていたヒーローは所詮は夢物語だと気付いた。戦争の恐怖、失った悲しみから脱退を決意。セミナー費や生活費、妹の学費のために半年間だけボーダーに残り後輩の育成をした

一番好きなヒーローシリーズは「激走戦隊 スピードセイバー」

しかも父親のデビュー作であった。父親はセイバード役であった

雅臥^{まさがお}称はセイバードグリーンの「スピードブレード」に似せている

清瀬^{きよせ}舞^{まい}

165cm

15歳

中学3年生

7月30日

O型

好きなもの：ケーキ おばあちゃんのご飯 粘土工作

嫌いなもの：虫 プール

趣味：お菓子作り

星座：ペんぎん座

家族：祖母、兄

清瀬^{きよせ}フネ

163cm

74歳

9月1日

B型

好きなもの：お花 時代劇 フェルト

嫌いなもの：すっぱい物

趣味：フェルト

星座 : おおかみ座

家族 : 孫(澄人) 孫(舞)

清瀬^{きよせ}巨^{わたる}

195cm

享年31歳

俳優

10月24日

O型

好きなもの : 甘い物 家族 模型

嫌いなもの : 雷 犬

趣味 : 模型 ジム

星座 : とけい座

家族 : 義母 澄人 舞

清瀬^{きよせ}翔子^{しょうこ}

169cm

享年35歳

パート主婦

4月1日

B型

好きなもの：すっぱい物 桃 恋愛ドラマ

嫌いなもの：バス 冬

趣味：ドラマ鑑賞 掃除

星座：はやぶさ座

家族：母 旦那 澄人 舞